

## 「現集団」の動態と「コミュニティの品質」の考察

—『ヲシテ文献（ミカサフミ）』のタカマナルアヤと「コミュニティの品質」、そこから「社会政策の基本」と「移民の病理」を読み解く—

森田成男（神道史学会、社会・経済システム学会会員）

### はじめに

本稿は、文化的伝統の「霊性のまなざし」などの「普遍なるもの」から、「コミュニティの品質」と、次の時代の「社会・経済システム」をさぐる試みである。権力と富の分配に著しい不均衡が生じている現代社会と移民の病理、戦争経済、サイバー戦争の諸現象を検証していく。

そして、まだすべてのアヤが発見されていない『ミカサフミ』の中の、ひとつのアヤである「タカマナルアヤ」の、私たちの精神文化の故郷（原点）の思惟体系についても整理していく。「コミュニティの品質」の意味には、「霊性」、すなわち森羅万象の中に「顕界・幽界（顕・暗在系）」を感得していたスピリチュアルな伝統社会の安定性の側面の積極的評価が含まれる。

全体的に、以下の7つの章立てで、相互のイシュー間の連関性も読み解いていく。

- 1、蔵内数太の問い、ホモ・ルーデンス、呼吸する民族音楽
- 2、ヲシテ文献が隠れた経緯をさぐる、タカマナルアヤの行数番号 41001～41048
- 3、タカマナルアヤの行数番号 41049～41128 について、日本の環状列石遺跡群
- 4、ダグラス・マレー『西洋の自死』の問題提議、移民の病理現象
- 5、世界史のチェス・ゲーム、グローバリズムの近現代史
- 6、サイバー戦争の実相、戦争経済の不道徳
- 7、「コミュニティの品質」と各国の精神文化体系を守る

読者が内容を検証できるように『記紀原書 ヲシテ 増補版（上下）』（2021）の、原テキストの行数番号を都度記載し、ヲシテ文字に不慣れな方のためルビを付して、（ ）内に大意を簡潔に述べながら、霊性の表現あふれる『ヲシテ文献（ミカサフミ）』の考察をも進めていく。

### 1. 蔵内数太の問い、ホモ・ルーデンス、呼吸する民族音楽

神戸女学院大学の六車進子は、『蔵内数太の問い』（1991）において、蔵内数太（1896～1988）の現象学的社会学が基底にもつ人間社会の、我と汝の関係を基盤とする「コミュニティ」の奥深さへの洞察を語っている。

「身近で些細な歴史の出来事や平凡な、あるいは体制からはぐれ流動する人々を注視した蔵内は、過去と未来の交差するいま・ここでの危機の問題意識と、新たな発想を常に願っていた。

蔵内に社会学を志させたと繰り返し熱っぽく語っていたこと、中学の頃みた、旭川沿いの料亭から嘲笑こめて投下される残飯を川原で必死に拾い集め口に使っていた一家族の姿、上京した大正 10（1921）年前後の社会・文化の激動、これらが、蔵内社会学が現前化してくる（筆者注：真剣勝負のリアルな学問の）沸騰する現場なのである。

人間を含むあらゆる生きものは、自己の親を選ぶことはできないし、自分の生みおとされる場所を選ぶこともできない。生きる場所の選択ということも、生みおとされた場所に関係をもち、これに制約されることが否定できない。そして社会そのものにも、本質的に、つねに社会の外から働いている力がある。

「運命（命）と自然法則（理）は、社会のかなたから社会を規定している力（超社会的）として社会に内在化され、社会的潮流（勢）と規範（法）は、いずれも社会そのものから生み出される。一方、個別性と一般性の観点から分けると、命と勢は個別的、一回的なものを現わし、理や法は事物や人を一般的に規定している」。

これら「理（自然法則）、法（社会規範）、勢（社会的潮流）、命（運命）」の、四者の働きの緊張関係を孕ませた、歴史・社会現象の「からまりの契機」への深い洞察が蔵内社会学の特徴である。学説史的に「理・法・勢・命」の枠組みは、社会科学のコント、デュルケム、タルド、クルノーの四者によって、とくに強調された四つの観点を包含するものとなっている。

「蔵内には理法への信奉と同時に、それ以上に、普遍を潜り抜け、さらにときの権勢の渦のなかに裸形化してくる、絶対的に特殊なるもの、偶然なるものへの信奉がある」。

わが国の『尤双紙』〔寛永 11（1634）年〕の下巻第二七「おさるゝ物」に、「非理法権天」という、人間社会の核心をついた言辞がある。

「非は理に勝たず、理は法に勝たず、法は権＝勢に勝たず、権勢は天＝命に勝たず」と。つまるところ、どの国の歴史においても、非道を尽くす世俗権力・権勢は永遠ではなく、いずれ自ら分解過程に入り、滅び去ってきたのが歴史の常態であった事実である。

全体社会の各「利益集団」が織りなす流動的な基本構造と、その社会変動の実態を大きくつかまえようとした蔵内数太博士は、教育社会学など多様な分野で、さまざまな学術遺産を遺してくれている。

追手門学院大学の矢谷慈國たちによる、蔵内社会学の主要論文の英訳による海外への一連の発信も、あるいは筆者の 10 年間に越える「現集団」及び「後集団」概念からの、世界の「利益集団」群の生息メカニズムの、天理大学の『アメリカス研究』誌上での一連の論考も蔵内数太博士の深くて広い問題意識の大迫力が、背中を押している故の結果である。〔注 1〕

（領家、1985。六車、1991、127 - 130。矢谷、2004、2006、2007。今井、2006。藤岡、2008、2012。森田、2014、2020。竹村、2017、176 - 199）

一方、オランダのヨハン・ホイジンガ（1872～1945）の、歴史学・民族学・言語学などを総合して考察した『ホモ・ルーデンス』（1938＝1971）は、人間存在の根本的な「生きることの本質」と「遊び」という、失ってはならないところの「ゆとり・精神文化」と、他人に迷惑をかけない「遊びの無垢な崇高性」を教えている。

遊びは文化の中の、単に一部分をなすものではなく、文化そのものが遊びの形式を踏み、その性格を帯びて私たちの精神文化・文明は発展してきた。私たちには気づき難いが、「ゆとり・精神文化」は確実に、5・7調の和歌を含めて、大宇宙の奥深い「霊性」、及び「幽界・暗在系」の彼方の次元へもつながっている。

それだけに、人類の精神的故郷のひとつである、北米と欧州諸国の深い精神文化が、現在のグローバル資本主義エリート層の唯我独尊の強欲と、無秩序な移民政策により、粉々に攪乱・破壊されていくのは、悲しみ以外の何物でもない。しかし、まだ間に合うことができる。

私たちの日常生活には、働くこと、食べること、仲間と楽しいおしゃべりすること、大宇宙の天界からの恵みに感謝することなど、さまざまな局面があるが、とりわけ歌ったり、仲間と楽器を奏でることは至福の時間でもある。

世界の国々の、いろいろな音楽表現を見てみると、必ずしも一オクターブは、十二平均律で分割されてはいない。現実の日本であれば、明治時代以来の、西洋由来の鍵盤楽器やクラシック音楽の普及のみならず、何割かの人々は従来からの伝統的なお箏や、三味線や尺八、謡曲（能楽）、民謡、歌謡曲（演歌）を積極的に味わい、楽器を奏でて楽しんでいる。小泉文夫（1927～1983）が指摘するように、「西洋由来の、一オクターブを十二平均律で分けた、そうした機械的な楽器ですべてまかなってしまうということには、いささかの疑問がある」。

たとえば、アラビアの地域のように二十四分割や、細かく五十数分割してあったり、微少音程などもある。あるいは東南アジアのように五等分平均律、七等分平均律、九等分平均律といったような平均律の例があったりする。あるいは「声明（しょうみょう）」などを含めての、歴史的な音楽のように、ある音は確定しているが、そうした核音以外の音は浮動しているといった、微妙な感覚によって、音楽が支えられている場合もある。

つまり、世界のそれぞれの国ごとが独自に内包する「民族の精神文化」、及び何千年もかけて収斂してきたエートス（独特の精神）に根ざした文化の多様性が、地域ごとに棲み分けながら共存してきたのが人類の歩みであった。伝統文化という時間軸の中で磨かれてきた、民族ごとの異なる精神文化の尊さの存在である。（ホイジンガ、1938=1971。岡田、1995。小泉、2003b、10 - 20。ホーケン、2009。ラモー、1722=2018。伊藤友、2020）

古き良き時代の欧州諸国の、大作曲家たちの名曲の数々はいうまでもなく、それらはそれぞれの国の民族的感性を基盤にした、独自の精神文化を基礎にして生まれたものである。たとえば、ブルガリアやハンガリーなどの古民謡をふくめた民俗音楽の価値の普遍性は、東洋の日本の地においてもずっと深く味わい得てきたものである。

そして、音楽における西洋だけの尺度を疑い、全世界的な視点を求めてインド、アラビア、ペルシア、トルコ、インドネシア他、世界中のほとんどの伝統音楽を巡って記録に遺したのが、小泉文夫その人であった。〔注2〕

生身で日常の生活を営む、普通の人々の口ずさむ歌や、操る伝統的な楽器の奏でから飛び出している心情のエネルギー（自己表現する民族の精神文化）にこそ、普遍的な文明・文化の価値がある。それゆえに、各国の伝承されてきたわらべ歌や子守歌のなかにも、民謡の基本的な

音楽パターンの独自性がみられる。当然に、日本のわらべ歌には、日本語の持つイントネーションと、5・7調のリズムなどが自然にそのまま取り入れられている。

(ホイジンガ、1938=1971。岡田、1995、100 - 112、206。小泉、2003a)

他の国々の精神文化の価値観を認め、その国の精神文化を破壊しないという道徳の原理は、「コミュニティの品質」破壊の、現実をどう回避していくかの重要な問題につながっている。

## 2. ヲシテ文献が隠れた経緯をさぐる、タカマナルアヤの行数番号 41001~41048

『ヲシテ文献 (ホツマツタエ他)』の原テキストが、国民に広く読まれてきたことで、わが国の建国が、カンヤマトイハワレヒコ (神武) の時代よりもはるかに遡ることがわかってきた。そして、わが国に仏教が入ってきた際の、物部氏などの拒絶の心情と、その受容を巡って混乱した経緯を、日本書紀は欽明、敏達、用明、崇峻などの御代の記述で述べている。

だが、このように物議をかもした仏教渡来よりも一世紀あまり前に、すでに儒教と漢字はわが国に入ってきている。『ヲシテ文献 (ホツマツタエ他)』など、建国以来の伝統の、大宇宙哲学の深遠な体系をもつ皇室の中枢部においては、儒教・漢字の伝来の際にこそ、もっと強烈な反撥があったであろうことが、普通に想像できる。

ところが意外にも、朝鮮半島経由の儒教と漢字の伝来を、「日本書紀はもとより古事記さえ、何事もなく至極スムーズに受け入れてしまったように書いているのである」。だがしかし、「本当は、仏教渡来の時よりも幾層倍かの深刻な軋轢があり、もっと血なまぐさい頑強な闘争が繰り広げられたのではなかったか。もっといえば、そういう事実があったにも関わらず、そのことを記紀は載せなかったのではないか。そんな風にも思えてくる」。

松本善之助たちは、『ヲシテ文献』がやむなく地下に隠れたところの、記紀編纂の約三百年前と推測される歴史的経緯の考究で、このように述べている。

「そしてこの三点 (ホツマツタエ、ミカサフミ、フトマニ) が永い間埋没していた、近江国高島郡内の後掲の水尾神社文書その他をみるに及んで、この疑いを一層深めないではおれなかった。そして、つまるところ、儒教が侵入してきた、まさにその時、ホツマツタエなどの貴書が地下に潜らざるをえなかった時ではなかったか。また、それは同時に、日本固有の古代文字が使われなくなった時期をも意味するのではないか、と考えざるをえなくなったのである」。

応神天皇 15 年の、日本に儒教が入った最初の記事 (百済の阿直岐なる者が経書、典籍をよく読むので、皇子菟道稚郎子 (うじのわきいらつこ) は彼を先生として儒教を教わった。応神天皇はさらに請うて学者の王仁を招く極端な傾倒ぶり) が、あまりに平易にすぎて、とても真実とは信じにくい。まして『ヲシテ文献』によって、縄文時代以来の皇室の中心にあった、高度な精神性があふれる、稀有な基本哲学が公になった今日、それはありえないと考えられている。

実際に、日本書紀も古事記も同様に、その後の時代の四人の皇子間の不和と殺戮の様子を、多くの枚数を費やし、二人の皇子はあえない最期を遂げるという筋書きを記している。

「本当は、一方のホツマを守ろうとする国粹派の二人の皇子が、外来文化を入れようとする儒教派の他の二人の皇子によって殺戮、または敗北させられたと考えられる。その四皇子とは次の如くである。国粹派①大山守（おおやまもり）命②隼総別（はやふさわけ）命。儒教派③菟道稚郎子（うじのわきいらつこ）皇子④大鷦鷯（仁徳天皇）。記紀に載るこれら四皇子に関する記述は、前に見た記述と同じく記紀の原資料から継受した内容であったろう。「菟道稚郎子（うじのわきいらつこ）の母は帰化人の娘だし、大山守の母は、おかしなことに記紀ともに12代景行天皇の媛と同名なのだ」。

記紀では継体天皇の祖は、稚渟毛二派（わかぬけふたまた）皇子とあるが、出典は『上宮記』に限られている。しかし、隼総別命を継体の祖とする史書は、次のように多数ある。

「①和解三尾大明神本土記（808）、②皇代記（1274頃）、③日本皇帝系図（1308頃）、④水鏡（1330頃）、⑤神皇正統録（1330頃）、⑥神皇正統記（1339）、⑦神明鏡（1430）、⑧和漢年契（1796）などである」。なお、宮下古文書とか富士古文書とかいわれるものがあり、「その中に大山守、隼総別など三皇子が富士山に拠ったとあるが、この点のみは他の記述を別にして注目される」。 （松本、1980、1993、148 - 159）

さらに、景行天皇や仲哀天皇の御代の「伊勢斎王」以来、雄略天皇及び継体天皇の皇女まで、ミツエシロ（伊勢斎王）の記述が長く途切れている（鎌倉時代末期の『二所太神宮例文』や『一代要記』の記録）ことも、この当時に『ワシテ文献』が隠れた事情と辻褃があっている。

ところで、『ミカサフミ』については、和仁佑安聡が記したとみられる『生州問答』（1779）に、もともと全部で六十四アヤあったと記載されている。現在、私たちが入手できているのは、和仁佑安聡が遺してくれた八アヤにすぎない。

すなわち、①「キツ（東西南北）ヨヂ（四至締）ノアヤ」、②「サカノリノアヤ」、③「ヒメミヲ（イサナギ・イサナミの子供たちの一女三男）ノアヤ」、④「コエソフノキサキタツアヤ」、⑤「ハルミヤ（皇太子・のちにアマカミを継ぐオシホミミ）ノアヤ」、⑥「タカマナルアヤ」、⑦「ナメコト（年中行事）ノアヤ」、⑧「ハニマツリ（古代の地鎮祭）ノアヤ」である。

そして、僧の溥泉（ふせん、安永年間に生存）が記述した『春日山紀（かすがやまのふみ）』や『朝日神紀（あさひのかみのふみ）』などから、七アヤ分の各題名が窺い知れている。

『ワシテ文献』考究 50年の池田満（神道史学会会員）によれば、以前に『ミカサフミ』に含めていた『トシウチニナスコトのアヤ』は、『カクノフミ』としての認識が望ましいことが判明したので、現在、『ミカサフミ』の一覧目録からは外れている。

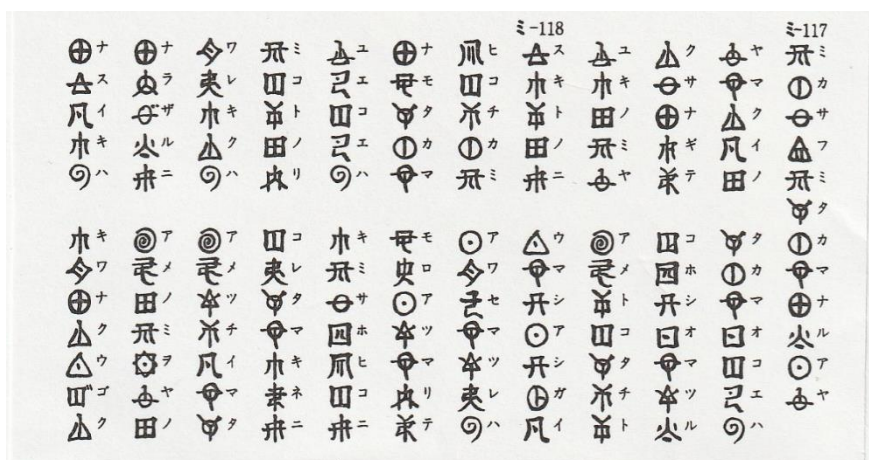
したがって、『カクノミハタ（カクノフミ）』で私たちが現在手にしているのは、文献名「アワウタのアヤ」（行数番号 53001～53248）と、「トシウチニナスコトのアヤ」（行数番号 55001～55096）、及び『フトマニ』128首の和歌（卦）の体系（行数番号 57001～57669）になる。

参考に、2012年末に、山梨県の旧家の屋根裏で発見されたワシテ文字の写本は、溥泉伝本の『和歌字咤紀』のことで、『カクノミハタ アワウタのアヤ』であった。これにより、「フトマニの図（モトアケ）」の構造の、深い意味内容がより明らかになったのである。

（和仁佑、1779。池田、2013、208 - 216。内藤、2019。池田、2020。茂木&原田、2023）

そして、このヲシテ文字での5・7調の、「タカマナルアヤ」の叙述で驚かされるのは、この縄文時代に、私たちの住む大地が、経験的に大きな球状のものであろうことが把握されていたことで、大宇宙における「クニタマ（地球）」の運行、及び大自然の諸現象の解釈や、長さの単位などが詠われている。ヲシテ文字の原テキストは、漢字伝来以前の原初ヤマトコトバが行き交う《言語空間》である。それに無頓着な漢字仮名交じりの直訳は、偽の物語の危険がある。概念が微妙なヲシテの語彙は、厳密にわざとカタカナ表記としている理由をご理解頂きたい。

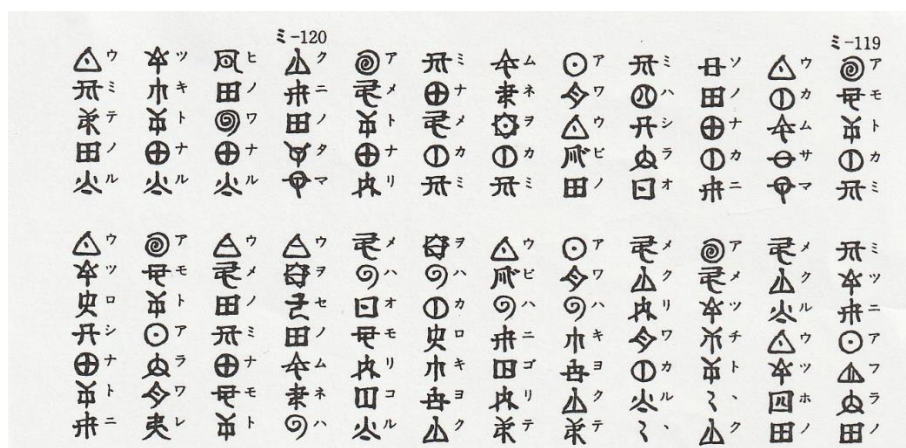
さらに、西欧文明における一神教との混同を避けるため、現代語での解釈において原則としてカミと表記している。まずはヲシテ文字で記された「タカマナルアヤ」の原テキストの、最初の部分の行数番号41001~41012を、下にそのまま記して解釈していく。



大意は、(ヤマクイの タカマ (宮中の別名をタカマとも言う) を乞えば 草なぎて コホシ (九星) をまつる ユキ (悠紀) のミヤ アメトコタチ (アモトとトホカミエヒタメ) と スキ (主基) トノ (殿) に ウマシアシガイ ヒコチカミ (キツヲサネ (東西央南北) とアミヤシノウの十一のカミ) 合わせ祀れば (大嘗祭の悠紀宮と主基宮の意味) 名もタカマ モロ (諸) 集まりて 故乞えば キミ (アマテルカミ) サホヒコに ミコトノリ これタマキネ (トヨケカミのイミナ (実名)) に ワレ聴くは アメツチ (天地) いまだ 成らざるに アメ (天) のミヲヤ (御祖) の ナス (生す) イキ (呼吸) は キワ (際) 無く動く)。

この箇所では、コホシ (天空の九つの星・モトアケ (フトマニの図) の中央のアウワとトホカミエヒタメを指す) をアメトコタチとしてまつるユキ (悠紀) ミヤ、ウマシアシガイヒコチカミとしてまつるスキ (主基) トノ (殿) という、現代日本の皇室へ伝承されている大嘗祭の神事が述べられている。『アメリカス研究 26号』(2021) の拙論で詳述したように、『ホツマツタエ』の27アヤなどでも「悠紀宮、主基宮でのナメエ (大嘗祭)」が詠われている。

次に、ヲシテ文字で記された「タカマナルアヤ」の原テキストの、続く行数番号41013~41024を、下にそのまま記して解釈していく。



大意は、(アモト (天元) カミ (神) 水に油の 浮かむサマ (様) 巡るウツホ (空) の 那の中に アメツチ (天地) 届く ミハシラ (御柱) を 巡り分かるる アワウビ (原初の軽いもの重いもの) の アワ (原初の軽いもの) は清くて ムネ (根本の) ヲカミ (ヲのはたらき) ウビは濁りて ミナ (水) メカミ (メのはたらき) ヲ (陽) は軽ろ清く アメ (天) と成りメ (陰) はオモリ (重り) コル (凝る) クニノタマ (地球) ウヲセ (大元のヲ) のムネ (根本) は ヒノワ (日の輪) なる ウメ (大元のメ) のミナモト (源) 月となる アモト (天元) あらわれ 生みてのる ウツロ (空) シナトに。

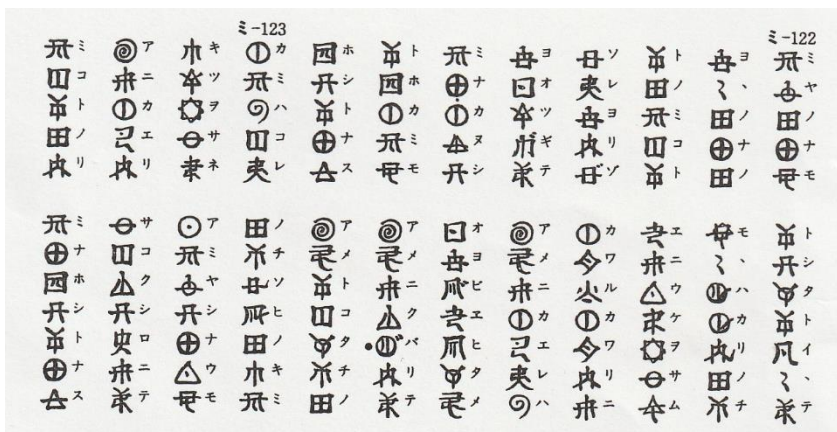
続いて、ヲシテ文字で記された「タカマナルアヤ」の原テキストの、行数番号 41025~41036 を、下にそのまま記して解釈していく。



大意は、(ハ (地) を巡り アリサマ (有り様) なせば 月の水 海とたたえて ヒ (日) に 生める ウツホ (空) 動きて カセ (風) となる カセ (風) ホ (火) となれば ツチ (土・埴) もまた ミヅハニ (水と埴) となる このキツツ (五つつ) 交わり成れる カンヒト (初期の人) は アウワ (天・人・地) あらわる ミナカヌシ クニタマ (地球) ヤモ (八方) に ヨロコ (万の子孫たち) 生み 初にヲウミ (今の琵琶湖沿岸地方) の エト (兄弟) の子の エミコ (兄御子) ア (初代アマカミのクニトコタチ) に継ぎ ヲウミ (今の琵琶湖沿岸地方) タス (治める) オトミコ (弟御子) の住む トシタ (富士山南麓の古いミヤ) ミヤ これ今ハ

ラ（富士山南麓のミヤ）のナ（名）の）。

続いて、ヲシテ文字で記された「タカマナルアヤ」の原テキストの、行数番号 41037～41048 を、下にそのまま記して解釈していく。尚、右側に黒のポイントの付くヲシテ文字は、元写本の虫食いで判別困難な中での文字である。



大意は、（ミヤ（宮）の名も トシタ（富士山南麓のミヤ：今はハラのみヤであるが古くにはトシタと呼んでいた））と書いて 世々の名の モモハカリ（100×10 万年：ハカリ（マス）とは 10 万の位を指す概念）後 ト（弟）のミコト（命）は エ（兄）に受けヲサム（治める）それよりぞ 代わる代わりに 世を継ぎて アメ（天）に帰れば ミナカヌシ 及びエヒタメトホカミも アメ（天）に配りて 星となす アメトコタチの カミはこれ のちソヒ（十一）のキミの キツヲサネ アミヤシナウも ア（天）にカエリ（還えり） サコクシロにて ミコトノリ 皆星となす）。

（池田、2012、61 - 64。池田・辻、2021b、507 - 512）

### 3. タカマナルアヤの行数番号 41049～41128、日本の環状列石遺跡群

続いて「タカマナルアヤ」の行数番号 41049～41060 を、下にそのまま記して解釈していく。





大意は、(このカミは ハラワタ (臓腑) イノチ (生命) ミケ (御食) をモル (守る) ウマシアシカイ ヒコヂカミ かれアメミコ (天御子) と ワ (地・埴) のミコ (御子) と クニトコタチ の ナヨ (七代) のカミ 皆サコクシロ よりの星 ア (天) に現わるる ヒ (日・太陽) のワタリ (径・直径) モモキソ (百五十) トメヂ (長さの単位) 月のホド (程・径) ナソ (七十) トメチ内 ヒ (太陽) の巡り ナカフシ (中節) のト (外) の 赤き道 ヤヨロ (八万) トメチの 月を去る 月の白道 ヨヨ (四万) ギ (トメチ) 内 クニタマ (地球) ワタリ (径) は)。

続いて、ヲシテ文字で記された「タカマナルアヤ」の原テキストの、行数番号 41061~41072 を、下にそのまま記して解釈していく。



大意は、(モソヨ (百十四) ギ (トメチ) の メグリ (周り) ミモムソ (三百六十) キ (五) トメヂの 月より近き 日は遠く 月はナカバニ (半ばに) 近きゆえ 並べ見るなり モロホシ (諸々の星) は アメ (天) にかかりて マダラ (斑) なす ツツキ (五惑星) は元の 色ツカサ (司・物理的運動の主体) フソミカ (二十三日) 星は ヨシアシ (吉兆) を ハラノ (原野・現象世界) に示す アマ (天) 巡り 日は大きくて ヒトオクレ (一遅れ) ミモムソキ (三百六十五) タビ (度・回) ヒトトシ (一年) の ハルタツヒ (春分に立つ日) には元に来て ヒトタビ (一度) 元の)。

この箇所朗詠では、クニタマ (地球) の直径は、モソヨ (114) トメヂ、周囲長さは 365 トメヂで、およそ 365 日でヒトトシ (1年) である、と述べている。ハルタツヒ (春分) の概念が、すでにこの当時の天文観測から知られていたことがわかる。

いまから約 4000 年から 3500 年前とされる環状列石の遺跡が、東京都町田市の田端遺跡や青森県小牧野遺跡、秋田県の大湯 (おおゆ) を始め、日本列島の各地で発見されている。参考に、北海道小樽市塩谷町忍路 (おしよろ) の遺構は、大きな長い石を立てており、長径約 28m を有している。田端遺跡の環状積石遺構は、丹沢の最高峰蛭ヶ岳 (ひるがたけ) の山頂に冬至の日没を見る位置に築かれており、立石を伴う配石が長楕円形に連なったものである。

一般的に、人々はなぜ川から 8500 個以上もの岩石を、遠くまで運んで環状列石の施設を形作ったのか。縄文時代中期には、すでに天体観測を行えるに足る算術知識を有していたことが

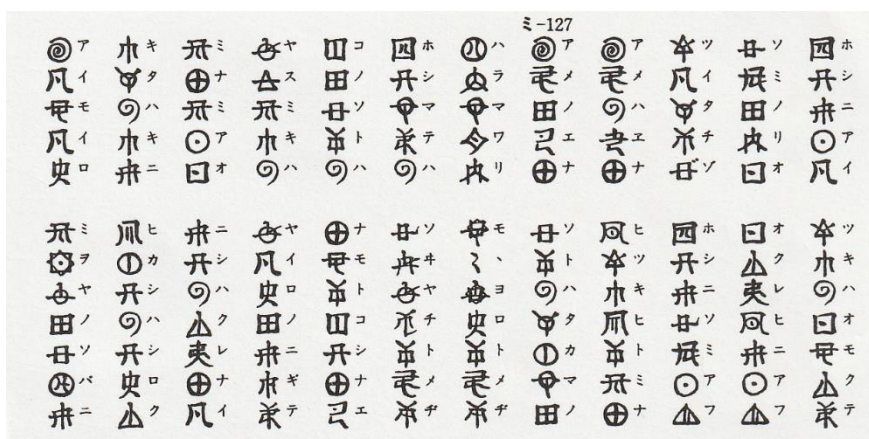
推測されてきている。

しかも、大湯環状列石の岩石配置のなかに、聖山を指す石組みがみられることから、太陽軌道の特異点(二至二分)や天体観測の目印など、さまざまな観点からの検証が試みられている。

たとえば岐阜県中津川市の、一連の方位型巨石群の調査により、古代の人々が北極星や二至二分の太陽観測から、東西南北という方位の4方向の目印としていたことがわかってきている。おそらく天体観測が行われていたのであろう、これらの環状列石遺跡群と、「タカマナルアヤ」などの叙述内容との関連性が、近年とくに注目されてきている。

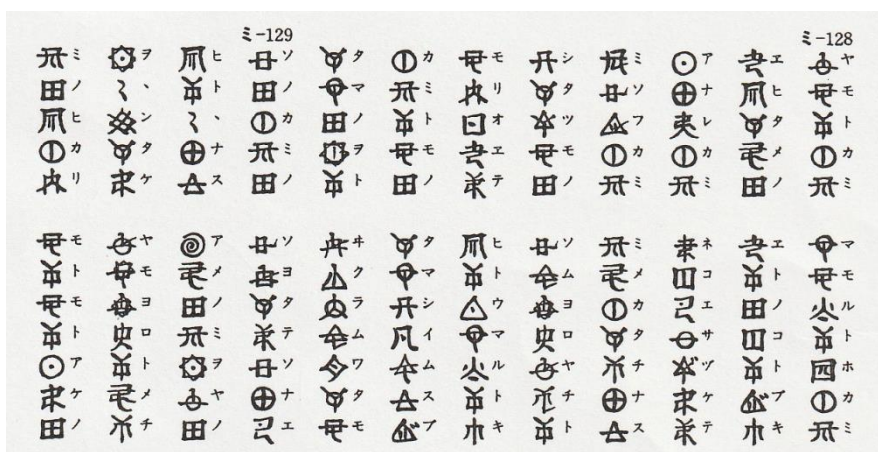
(斎藤、1975、35 - 36。羽根田、1976。秋元、2005。田中・佐原、2011、177 - 179。中村、2013。御所野縄文博物館、2019。柳原、2021、11 - 19。平津、2021。小林、2021、20 - 26)

続いて、ヲシテ文字で記された「タカマナルアヤ」の原テキストの、行数番号41073~41084を、下にそのまま記して解釈していく。



大意は、(星に合い 月は重くて ソミノリ (十三の日程) を 遅れ日に合う ツイタチ (朔日・一日) ぞ 星にソミ (十三) 会う アメ (天・宇宙) はエナ (胞衣) ヒツキ (日月) ヒト (人) 皆 アメ (天・宇宙) のエナ (胞衣) 外はタカマの ハラ (原・大宇宙) 回り モモヨロ (百万) トメヂ 星までは ソキヤチ (十五万八千) トメヂ この外は 名もトコシナエ (永久・永遠) ヤスミ (八隅) キハ (際) ヤイロ (八色) のニギテ (和幣) 南アオ (青) 西はクレナイ (紅) 北は黄に 東は白く アイモイロ (間も色) ミヲヤ (御祖) の側に)。

月は重いためにその周りは遅く、1年で12に余り、13回太陽にめぐり逢い、ヒツキ(日月)ヒト(人)にもこの周期は及んでいる。さらに、タカマのハラ(大宇宙)の周囲長さ100万トメヂを円周率で割り、さらに2で割り地球の半径の58トメヂを引くと、この「タカマナルアヤ」が詠う通りに、星までがおおよそソキヤチ(15万8千)トメヂとなり、算術上の数字が合致してくる事実である。続いて、ヲシテ文字で記された「タカマナルアヤ」の原テキストの、行数番号41085~41096を、下にそのまま記して解釈していく。



大意は、(ヤモトカミ (八元のはたらき) 守るトホカミ エヒタメの エト (兄弟) のコト  
 ブキ (寿き) アナレカミ ネコエ (音声) さづけて ミソフ (三十二) カミ 見目かたち (人  
 体) 成す シタツモノ (下つ物) ソムヨロヤチ (十六万八千) と 守りを得て 人生まる時  
 カミ (形而上のもの) と物 (物質) タマシイ (タマ・シキ) 結ぶ タマのヲ (緒) と キク  
 ラムワタも そのカミ (はたらき) の ソヨ (十四) 経て備え 人となす アメ (天) のミヲ  
 ヤ (御祖) の ヲヲンタケ (大御丈) ヤモヨロ (八百万) トメチ 身の光 元々明けの)。

拙論の『『ホツマツタエ』の 34、38、39、40 アヤ及び『フトマニ』のウタの考察』と、「住  
 吉大社神代記、皇太神宮儀式帳、ヲシテ文献 (フトマニ他) の、相互関連性をさぐる」にて、  
 128 首の占いの和歌 (卦) の解釈でふれた、重要なミソフ (三十二) カミの大宇宙哲学が、こ  
 の『ミカサフミ』の「タカマナルアヤ」にも出ているのである。

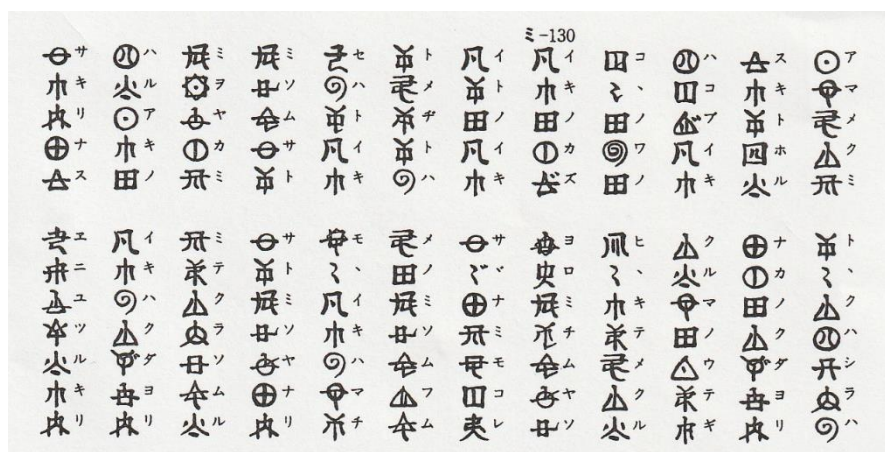
(池田、2012、65 - 68。池田・辻、2021b、513 - 518。森田、2023b、c。茂木&原田、2023)

ところで日本のみならず、煮炊きに使われた痕跡がある縄文土器が、世界の各地で出土して  
 きている。縄文時代前期において海面は今より低く、日本列島周辺の環太平洋沿岸地域の間で  
 活発な交流があったことが推定されている。煮炊き用の土器という道具が、生活様式の根本を  
 変え、食糧の安定供給から人口の増大をもたらしてきた。

そして、青森県の大平山元 (おおだいやまもと) 遺跡からは、旧石器時代の石器と一緒に食  
 べ物の焦げのついた、16500 年前の世界最古の土器が出土している。

重要なことは、考古学による古代史探求の世界に、縄文時代前期中葉にまでさかのぼる、『ヲ  
 シテ文献 (ホツマツタエ、ミカサフミ、フトマニ他)』という文献史料の出現が、当時の実生活  
 の具体的様態の解明を進ませてきている、最先端の学問状況である。

そして、ヲシテ文字で記された「タカマナルアヤ」の原テキストの、続きの行数番号 41097  
 ~41108 を、下にそのまま記して解釈していく。



大意は、(アマ (天) 恵み 届く柱は 透き徹る ナカ (大宇宙の中心) の管より 運ぶイキ (息・呼吸) 車のウテギ (腕木) ココノ (九九の) 輪の 響きて巡る イキの数 ヨロミチムヤソ (万三千六百八十、参考に  $0.801 \times 13680 = 10.958$  km) イトのイキ ササナミ (さざ波の長さ) もこれ トメヂとは メ (陰) のミソム (三十六) 踏むこと (そもその長さの根本の単位は女性の 36 歩の長さから始まるの意か) (そして) セ (畦) はトイキ (イキの十倍の単位) で モモイキ (イキの百倍の単位) はマチ (町) ミソム (1 マチの三十六倍が) サト (里) サト (里の) ミソヤ (三十八倍) なり ミヲヤ (御祖) カミ ミテグラ (幣) 染むる 春秋の イキはクダ (管・天に向けた柱) より サキリ (ヒヲ・一陽) なす エ (兄) にゆづる霧)。

因みに、現代に知られている地球の赤道周囲の長さは 40070.4 km である。このタカマナルアヤで詠われる、この長さの単位 (クニタマ周囲約 40000 km の前提から) の近似値を試算すれば、1 トメヂ 109.59 km (1 サトの 38 倍)、1 サト 2.884 km (1 マチの 36 倍) などと推定でき、部分的に、後世の尺貫法における 36 町で 1 里と称するのと合致している事実である。

イキは、現代日本語の、空間の範囲を仕切る「域・閾値」の概念につながっていると見ることできる。トメヂやサトとは、クニタマ周囲  $40000 \div 365 = 109.589$  km  $\div 38 = 2.8839$  km であり、一連の叙述がトメヂやサトを説明している。はるかに時代が降った後において、これら『ヲシテ文献』が詠う長さの単位の、メ、セ、イキ、マチ (町)、サト (里) の原型の考え方・概念が、漢字文献へとつながっている、連続性の側面を読み取ることができるのではなからうか。

そして考古学の事実として、たとえば秋田県の大湯環状列石では、高さ 5 メートルの太い柱が六本も並んでいた。それは建物の支柱ではなくて、ただ突っ立てていただけのようである。しかもその配置は、三本と三本の形になっていた。大湯では、野中堂と万座の 2 基の環状列石の、それぞれ北西部にある日時計型組石を結ぶ線の延長上に夏至の日没が当たるように設計されている。

日本天文学考古学会の柳原輝明は「遺跡大湯環状列石の天体観測」において、日時計状組石の役割りや、二列の木柱列の位置と特定の星の観測の可能性が考えられ、「二列の木柱列が全天で最も明るい星シリウスを 10 月の初めの夜明けに観察していた。その日は縄文人にとって、最

も重要な食料である粟の収穫時期である。これらのことから、遺跡大湯環状列石は間違いなく太陽と星の天体観測の場であったと言える」と指摘している。

また、青森県の三内丸山遺跡においても、巨大な粟の樹の柱が六本、サイコロの「六の目」のような形で並び、中心間の距離はすべておよそ4.2メートルにそろっていたのである。

さらに、考古学者の小林達雄は『縄文人追跡』（2000）において、むき出しの柱だけが天を衝いて立っていたらと強く主張している。天空に向かって柱を立てることを、重要な祭祀・神事とする慣習は、いまも全国各地に多く存在している。長野県諏訪湖畔に鎮座する諏訪大社（上社本宮、同前宮、下社春宮、同秋宮の総称）で、七年ごとに行われる御柱祭は、その代表例である。

佐賀県吉野ヶ里遺跡の北墳丘墓からも、弥生時代の大型甕棺 14 基が出土し、そこは集落のリーダーたちを葬った祭壇の場所と見られ、復元されている。その南隣には、高さ7メートルの一本柱が天空に向かって立っている。

また、同じ佐賀県鳥栖市の柚比本村（ゆびほんむら）遺跡でも、同じような状況の一本柱の跡が確認されている。縄文・弥生時代においては、カミのヨリシロ（依代）として、天空に向けて御柱（クダ・管）を立てるということが、大切な神事であったということが了解できよう。

（池田、1993、104 - 107。中村、2012。平津、2021。柳原、2021、11 - 19）

続いて、原テキストの行数番号 41109～41120 を、下にそのまま記して解釈していく。



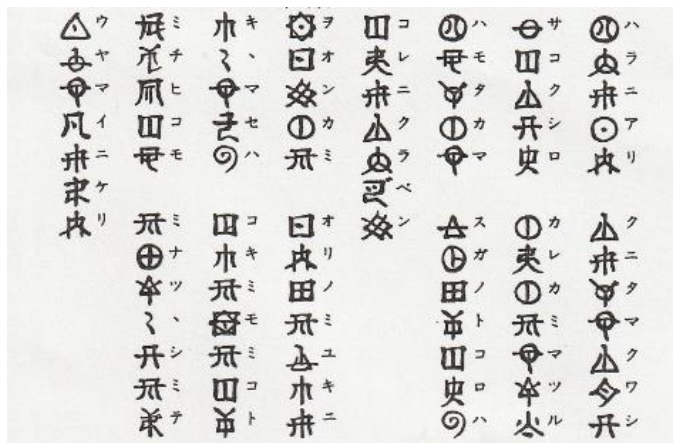
大意は、(日を招き 冬ヒヲ (一陽) を返す ト (弟) は夏に 月のメ (陰) 返す 春秋ぞ アメ (天) ゆづる日は ア (天) のサキリ (ヒヲ・一陽) クニゆづる月 ハ (植・地) のサキリ (ヒヲ・一陽) てればタタユル (称ゆる) ミナカヌシ アキリ (天霧) に乗りて ヤモ (八方) に行き 日月の道を ゆづりハ (地) に アガタのカミの イロ国と 名づけア (天) の道 ハ (地) の道も 葦のごとくに 立つゆえに ヨソコ (四十九) のカミは ア (天) に 還り 元のタカマの)。

ヨソコ (49) のカミとは、モトアケ (フトマニの図) を指している。古事記などにも出てくる ミナカヌシ (アメナカヌシ) が、この「タカマナルアヤ」にも出てくる。天地開闢が起きてから、初めて出現したヒト (人) をミナカヌシと尊称し、アマカミの初代となったクニトコタ

チは、ミナカヌシ出現から幾世代もの長い年月を経た後であった。

(池田、2020、118)

続いて、ヲシテ文字で記された「タカマナルアヤ」の最後の部分の、行数番号 41121～41128 を下にそのまま記して解釈する。このアヤを 11 に分割して、全体を解説してきたわけである。



大意は、(ハラ (大宇宙の中心) に在り クニタマ (地球) クワシ (精し) サコクシロ カレ (故) カミ (アメトコタチとウマシアシガイヒコチ) 祀る ハ (地・宮中のカシコトコロ) もタカマ スガノ (清の) 所は これに比べん ヲランカミ (8代アマカミ・アマテルの尊称) 折のミユキ (行幸) に 聞きませば コ (九) キミ (君) モ (百) ミコ (御子) と ミチヒコ (三千彦) も 皆謹みて 敬いにけり)。

(池田、2012、69 - 71。池田・辻、2021b、519 - 522)

以上のように、『ヲシテ文献』の朗詠は、全体的に、「人間存在」それ自身の始原への問い、人類普遍のスピリチュアルな在り方と、森羅万象の中に「顕界・幽界 (顕・暗在系)」が共に生きて存在していることを詠っている。

たとえば後世の、わが国の伝統的な神社仏閣の「寺子屋」は、単に読み書き・ソロバンの基礎知識を与えるのみならず、親孝行や家族のきずなの大切さや、平凡な日常生活のなかに神秘的で大切なもの (暗在系) を深く感知するウタ (和歌・俳句・詩) の直観能力をも養ってきた。

今読んできた『ミカサフミ』や、拙論でふれた『フトマニ』の 128 首の和歌 (卦) も、大宇宙を構成する「顕界・幽界 (顕・暗在系)」への深い感性から、「現象世界」の出来事を捉えており、その清明の思惟が、人間社会の「コミュニティの品質」につながっている側面がある。

次の章では、各国における不法移民などによる、「伝統的精神文化」と、その「コミュニティの品質」への影響、及びわが国の治安についての問題点を深く掘り下げて考えていく。

#### 4. ダグラス・マレー『西洋の自死』の問題提議、移民の病理現象

2000 年以降の、今日のアムステルダムやロッテルダムの郊外にある、多くの地区には、さまざまな「ミニ・トルコ」や「ミニ・モロッコ」が存在する。食料品店ではイスラム教の戒律に

副った商品が売られ、女性たちは皆、何らかの形で髪を覆っている。

ダグラス・マレーによれば、欧州は移民の滞在を許すことだけではなく、自分の国の富を食い物にする、不法入国者を支援することでも世界の先頭を走っているようだ。

ドイツのメルケル首相は、この当時の 2015 年 9 月に、スイスのベルン大学から名誉博士号を授与されている。その際の聴衆との質疑応答で、同年配の女性から、先ほど首相は難民に対する欧州人の責任について語りましたが、他の欧州人の幸福を守るという欧州人への責任についてはどうなのでしょう？

首相は殺到する移民たちから、どうやって欧州人と欧州諸国が大切にしてきた伝統文化をまもるのですかと、根本的に重要なことを問われていた。

ベルギーの調査機関が、同国の国籍を持つテロ犯について調査したところ、その多くが国家による援助を受けながらテロ計画を練っていたことが判明した。

たとえば、「2015 年 11 月のパリ同時テロの首謀者であるサラ・アブデスラムは、テロに先立つ期間に 1 万 9 千ユーロもの失業手当を受け取っていた。最後の支給日は事件のわずか数週間前だ。かくして欧州は人にカネを払って自分たちを襲わせた史上初めての社会になった」。

ではなぜ、ダボス会議を中心とする多くのグローバリストたちは、「コミュニティの品質破壊」の移民政策をそこまで強行に推進するのだろうか。

ダボスの「世界経済フォーラム」に集まるビジネスエリート、官僚エリートそして政治エリートたちは、すでによく知っている者同士である。

表向きはロビイストや、日本の「経団連」のような機関を使って、大量の移民や難民が経済成長に必要であると主張する。つまり実態は、先進国の人件費が高すぎるから、安い労働力が必要だということで、要するに、海外に展開するグローバル企業の、おカネ儲けが単純な動機だと指摘されている。

現在の欧州の緊迫した状況を見れば、社会にどうしても同化しないマイノリティの大規模な集団がいることで、国民の間に不安が広がり、各種のトラブルが多発していることがわかる。

日本では、かつてのK政権と財務省の政策判断ミスによる「失われた 30 年」の結果、日本経済の人件費は現在、世界最低水準となるまで国民の生活が痛めつけられた状態である。高度な職業倫理をもつ日本国民を、不当に低賃金で抑えつけながら、共生する意志の不確かな不法滞在者を毅然と国外退去させない、経済団体、地方自治体及び国の不作為の責任は大きい。

例えばシンガポールでは、低技能のサービス労働者を受け入れている企業は、短期ビザのために労働者の月給の 2 割から 3 割の税金を政府に毎月払っている。つまり、移民がもたらす利益がきちんと国民に均等に分配されるように、移民政策は目的税と助成金を盛り込むべきなのだ。

「外国人材」の皆さんは、言語、宗教、文化、生活習慣といった属性を持った方々であり、取り替え可能なロボットのような存在ではない。むしろ、ひとつ間違えば欧州諸国であった 2010 年以降の暴動のように、歴史的に構築してきた「コミュニティの品質」と、神社仏閣の霊性の文化フィールドを一夜にして破壊してしまう側面をもっている。

しかも、『移民の政治経済学』（2017）のジョージ・ボージャスたちは、移民受け入れによって主に得するのはグローバル企業家たちであり、経済的に損をするのが国内労働者（国民）である。移民が惹き起こす文化的・社会的な軋轢の影響も、トータルに考慮すれば、その移民政策の経済効果は容易に「マイナス」になり得ることも示唆している。これは、やりたい放題のグローバリゼーション、新自由主義と、日本国民が今後どう対峙していくかの問題にもつながっている。

したがって焦眉の急として、日本においては、国民各層の賃金を今後引き上げていくことこそが現在の最優先の国民の課題であり、安易な「移民の導入」に反対という世論が、高まっているのは当然のことであろう。

実際、2023年度の『経済財政白書』も、「サービスを中心に物価上昇率が低い品目が多く、経済成長の足かせとなるデフレから脱却したといえる状況に至っていない」。「人件費を製品やサービスの価格に転嫁するなどして、物価と賃金がそろって上昇する好循環を生み出すことが課題」、と訴えている。（ボージャス、2017、208 - 220。マレー、2018。浜崎、2018。川口マーン、2018。施・黒宮・柴山・川端、2019。室伏、2019a、b）

トラック、バス、タクシーの運転手不足では、安易に新たに外国人労働者を入れるのではなく、海外からすでに来ておられる方々を含め、就職氷河期の40代、50代の、現在低賃金に甘んじているところの、引きこもりがちではあるが労働意欲のある約500万人強の方々にこそ、もっと高い給与で働く場を与えるのが優先順位である。つまり、運転手不足は、日本の就業構造の再編成による賃上げと、国内経済の底上げの大チャンスなのである。

2000年代以前の日本経済では、消費税率を5%に引き上げるまでは、実質賃金は上昇して活発な景況が続いていた。

「ところが、消費税率を5%に上げた途端に実質賃金の下落が始まった。日本経済がデフレに転落したからだ。消費税率を上げると、その分だけ実質所得が減少する。そうなる消費関連の企業の売り上げが落ちるから、リストラをしたり、賃金の低い非正規社員に置き換えたりして、人件費を削る。そうすると、また所得が落ちて、消費が減少するという悪循環に陥るのだ。それは2014年に消費税率を8%に引き上げたときも、2019年に10%に引き上げたときにも起きた」。

国柄が《新自由主義》の株価至上主義に洗脳され、主に外国の株主と経営者たちを富ませた反面、ここ30年間割を食ってきたのが、汗して働く真面目な国内の従業員たちである。自公政権によって国民の給料は上がらず、海外を豊かにする方ばかりに国民のおカネが回されて来た。そして、ウォール街が日本から収奪するシステムが、今は同時に、中国が日本を買収しやすいシステムとして機能してしまっている。それが今の危機的な局面である。

すでに若年層を中心の、年収200万円以下のワーキング・プアーの人々は、わが国で1100万人以上にも達している。景気の好循環を破壊し、国民を生活苦に痛めつけ、日本経済の浮揚を抑え続けているのが、財務省（自公政権）がセットした、弱者に犠牲を強いる「消費税」だ。

森永卓郎など多数のエコノミストが指摘するように、確実に景気が浮揚するように「消費税」



を軽減して、国策として非正規労働者の労賃を主体に、日本の全事業所において物価と賃金がバランスよく上昇する好循環を目指していかねばならない。

(中野、2019、2022。菊池、2020。藤井、2022a、2022b。平井、2022。藤井&森井、2022。馬淵&松田、2022、116 - 119。西田、2023b。森永卓、2023、92 - 106)

ところで不法滞在の移民でさえも、「米国の民主党のネオコンと強欲のグローバリストたちにとっては、安い労賃の人々であり、自分たち民主党に投票させる大票田として大きな役割があると言われている」。

実際に、バイデンが大統領になって最初に行った政策が、メキシコ国境の全面解放だった。過剰どころではないところの、中南米や中国からの大量の不法移民を受け入れている現実である。その数は、バイデン政権開始から2年弱で、すでに400万人以上。1日平均1万8千人が入国したと報じられている。

(山中、2022。及川、2022。我那覇&山中、2023。西森、2023)

当然に、「不法移民の中には、凶悪な犯罪者、麻薬業者、人身売買業者が含まれている。フェンタニルという鎮静剤に使われる麻薬が業者によって広まり、薬物の過剰摂取で死亡した米国人が、1日あたり約250人、1時間あたり約11人も死亡している。そんな状況にもかかわらず、民主党上院リーダーであるチャック・シューマー上院議員は、米国内にいる1100万人以上の不法移民に恩赦を与えることを主張。恩赦とは市民権を与えることだ」。

「これに対して立ち上がったのが、テキサス州のグレッグ・アボット州知事(共和党)。アボット知事は、合衆国憲法とテキサス州憲法にある「侵略条項」を発動。大量の不法移民は、単なる移民受け入れではなく、「侵略」である。侵略に対しての防衛として、州兵を配備し、侵略者である不法移民を逮捕するとした」。

つまり、米国のネオコンとグローバリストたちは今、不法移民を大量に入れることで、彼らの投票により、民主党が大統領職を永久に取れる体制づくりを狙っていると言われている。

その意味で、EU(欧州連合)もまた、いま目に見える「グローバリズムが伝統社会を破壊する」大混乱の真っ最中にある。欧州では伝統的文化をもった27の国の上に、上部組織の欧州政府をつくり、単一の欧州市場をつくった。EUは各国の上の存在として、独自の政策(シェンゲン協定他)を実施してきた。

そのために、欧州諸国の歴史的な伝統文化や宗教的背景とは無縁な人々であっても、入りきれないほど大量の移民受け入れを推奨してきた。

そうして、本来はキリスト教圏の欧州に、大量のイスラム教徒がなだれ込んだ。その結果、労働単価の安い中東からの移民が、生まれつきに住んでいる欧州人たちから雇用を奪い続けてきた。しかも、各国の医療保険や生活保護など、欧州人が爪に灯をともしてコツコツと積み立ててきたおカネが、自由に使われるようになったのである。

ダグラス・マレーが描き出すのは、まさしく移民社会の荒廃した地獄絵の現実である。「そこで提示される風景は、移民によってもたらされる貧困と失業、移民によるユダヤ人の襲撃、強姦、女子割礼、少女の人身売買と頻発するテロ。ヨーロッパの文化的アイデンティティの崩壊

と、それに対する極右の台頭など、この先の日本においても予想され得るディストピアと大差ない風景である。マレーは言う、「欧州は自死を遂げつつある」。

根本的に考えれば、移民流出の国の人々の多数が、自国において自分たちの文化圏内で、幸せに暮らすように国際協調で工夫するのが「社会政策の王道」であった。本来的に人間は文化的な存在であり、基本的には自分が生まれ落ちた文化圏の中でこそ、一番能力を磨いておのれのタレント（能力）を発揮し、幸福に生きていくことができるのではないか。そのために、私たちは海外諸国の経済の拡大に向け、積極的に経済援助（ODA）などをしてきた。

ダグラス・マレーによれば、ロンドンでは 2011 年の段階で、白人の英国人が少数派になっており、2016 年に英国で生まれた子供で一番多かった男の子の名前が「モハメッド（ムハンマド）」であったと言う。

その意味で英国のEU離脱は正当であり、反グローバリズムの歴史的分岐点であったと見ることができる。

ナイジェル・ファラージ（英国独立党）は、まさに「英国のトランプ」と言われていた。反グローバリズムの波は、英国だけでなく、フランスのマリーヌ・ルペン、ドイツの政党「AfD（ドイツのための選択肢）」、ジョルジャ・メローニの「イタリアの同胞」などが飛躍的に躍進したのである。〔注3〕

（ボージャス、2017。マレー、2018、315 - 316。浜崎、2018、118 - 125。川口マーン、2018。施・黒宮・柴山・川端、2019。室伏、2019b。及川、2022、138 - 149）

現代につながる安全で文化的な、「まち（ゲマインシャフト）」の成り立ちと成熟は、歴史的事実として、欧州諸国や日本の各地において十三～十六世紀に普通に見られた。

たとえば、都市文化研究の川嶋将生たちは、十四世紀から現代にかけての、京都の「まち」の暗黙のルールと歴史的な在りようの大原則を教えている。

公家、武家、寺社勢力が入り乱れる中世の京都において、外来勢力の流入を阻むところの「自律性」の強い典型的な「町」を歴史的に形成し始めた。「そのころ、町内の家々がおカネを出し合って、夜回りなど町の警備を行うシステムができた。それが十五世紀になると、一挙に広がった」。

室町時代は、南北朝の内乱、応仁・文明の乱など、争乱及び社会の大混乱が絶え間なく続いた。そうしたなかで、外来のならず者たちから「自分の身は自分で守るという自治意識が高揚し、町が一種の裁判権を持ったり、木戸、構えなどの防御施設を持ち始めるのが、十五世紀後半から十六世紀前半にかけてであった」。

つまり、安全で文化的な生活空間を守るため、人々が結束し、やがて「町内」のまとまりができ、さらに団結・連合して「町組」ができ、「町組」が寄り集まって「上京」や「下京」などの「都市」が生まれてきたのである。

これらの「町内」の家々は、「職住一致」で、商売やモノづくりの仕事の空間と、盆栽や俳句や和歌など家でくつろぐ風流な「居住空間」が重層的に合わさった、絶妙の文化的ネットワークの「町」の全体社会を構成しながら現代に至っている。

当然に、「条例」のような、それぞれの「町」で人々が生活していくための「町」の規約、すなわち「町定め」「町式目」と呼ばれるものができあがってきた経緯である。

さらに、「まち」の公共性と同胞の一体感を際立たせたものが、祇園祭や天神祭などの神事・祭礼であった。たとえば祇園祭は、氏子町が主体になってはいたが、鋒や山を出すそれぞれの鉾町、山町を支援する特定の「寄町」が決まっていて、資金や人材を提供していた。

明治時代の初期、京都の町組がおカネを出し合い、土地を提供して小学校をつくった事例もあった。次世代への歴史教育は、クニや自治体任せにしない、という心意気である。

町衆、町人が主体となった安全な「公共空間」と「公共精神」の成立と、中世以来の、現代につながる七百年間の日本文化の伝統精神が、厳として日本の各地方の都市に生きている。

(川嶋、1976、1993。谷&増井、1994)

出入国在留管理庁によれば、2023年6月末時点で、日本には322万人の外国人が暮らしていると言う。日本の文化を理解する方々と、物質面の追求に偏らない、縄文時代以来の人間そのもの中心の、神社仏閣と共生する「コミュニティ」を一緒に発展させていきたいものである。

ところで、埼玉県川口市には、2023年秋現在でおよそ4000人位と推定される、入国して90日（ビザの期間切れ）たっても帰国しない、住民登録のない人々などが住んでおり、訪れてトラブルの各種に驚いた（川口市議会が今年6月に住民の安全への懸念を議決している）。

「日本の行政と社会は、外国人、特に日本人と共生する意志のない悪意の外国人に対応する準備がまったくできていない」。

きちんとした法治国家として、入国在留管理を精緻化し、国会議員が動いて不法滞在者を毅然と帰国させるのは行政機関の当然の責任である。一般的に、住民の安全のため、「不法滞在者や不法移民をコントロールしなければ、私たちの国家は存続できない」。最近のフランスでの移民の暴動を始め、欧州や北米の大混乱と、「コミュニティの品質」破壊を他山の石としなければならないのだ。（山岡、2023。石井、2023、76 - 85）

さらに、米国やカナダで今とくに深刻なのが、社会全体への違法薬物の蔓延である。

カナダ在住のやまたつ氏によれば、薬物の過剰摂取による死亡が後を絶たず、「米国では2021年に10万6699人が命を落とし、18歳から45歳の死因第1位になるほどです。単純計算で1日に、292人が薬物の過剰摂取で亡くなっているのです。カナダでも大きな問題になっていて、私の住むブリティッシュコロンビア州の死因の第2位が薬物の過剰摂取でした。薬物の過剰摂取が急増している背景には、フェンタニルの蔓延があります」。

現在の状況として、「フェンタニルは中国由来のものが中心であると言われています。中国から原材料がメキシコ西海岸に送られ、麻薬カルテルが製造、それがアメリカの南部国境から流入しています。トランプ政権下で、中国から直接アメリカに流入することは防げるようになりましたが、メキシコが経由地になっただけでした。不法移民と絡む問題で、2024年大統領選挙の主要な争点になることは間違いないでしょう」。

実際、2023年4月12日に、ブリティッシュコロンビア州リッチモンドで、3人の男が薬物の違法製造で逮捕されている。フェンタニル22kg（1100万人の致死量）、覚せい剤800g、コ

カイン 2 kg、末端価格 7.8 億円相当の薬物が押収されたが、この 3 人は逮捕された直後に保釈された。

カナダ在住のやまたつ氏たちによれば、北米における狂った「ソフト・オン・クライム（犯罪者に優しい）政策」のため、薬物の密造・密売・密輸がまったく止まらず、日々に治安が悪化してきており、社会生活が大混乱の大変な状況にあるとのこと。彼らはこのように述べる。

米国やカナダにおける社会の大混乱の背景には、「薬物合法化も過激ジェンダー・LGBT 活動、人種平等、ジェンダー平等などと、同じ問題があるように思えます。左翼リベラルの社会正義マンたちが、“あなたのために”を押し付けているだけで、“当事者”の話に耳を傾けていないのです」。

基本的に、保守主義の本質は、人間の理性を過信しないことであり、逆に左翼はすべてが理性によって分析することができ、合理的に社会を改革できると安易に考える傾向がある。何よりも人類誕生以来の常識に還ってみるべきだ。生物学的な男女の性差は確実に存在する。

（デランティ、2006。浜崎、2018。坂東、2019。西森、2022。及川、2022b。オーウェンズ、2022。岩田温、2023。やまたつ、2023、115 - 131）

## 5. 世界史のチェス・ゲーム、グローバリズムの近現代史

スメドレー・D・バトラー海兵隊少将は、米国の軍事史上でもっとも因習にとらわれない、率直にありのままを語る軍人の一人だった。「33 年と 4 か月、私はわが国でいちばんの機動力を誇る軍隊である海兵隊の現役軍人として仕えてきた。少尉から少将まですべての階級を経験した。そしてその期間のほとんどを、私は大企業、ウォール街、銀行家などを守るために、体のいい用心棒として過ごしてきたのだ。言うなれば資本主義に雇われた恐喝屋であり、ギャングであった……」。そのような関係は今日でも存在する。（ロスコフ、2009、286 - 346）

19 世紀以来の、世界史の大舞台（ゲーム盤）では、国際金融資本、グローバリスト、共産主義、元祖ネオコンなどの、公共ではなく、自分たちへの「私益追求のグループ」群がうごめいていた。現在私たちが目にして、ウクライナ戦争へと至るロシアへの、「英米のネオコンによる挑発行動」と、かつて石油や生活物資を禁輸された ABCD 包囲網の仕掛けによる、第二次世界大戦勃発などとのプロセスの類似性を指摘する人々も多い。

たとえば、シカゴ大学のジョン・ミアシャイマーは、ロシアがウクライナに侵攻する 9 日前の 2 月 15 日に、ユーチューブで配信されたインタビューでこう述べている。

ソ連崩壊後に NATO の東方拡大がはじまり、これこそがウクライナの大参事の根本的な要因である。プーチンは、NATO のウクライナへの進出は自国存亡の危機だ。もうこれ以上の NATO の拡大は許されないと警告を発信していた。「それにもかかわらず、米国は東方拡大に深く関与していきました。いわば、米国は熊（ロシア＝プーチン）の目を棒でついたので」。

クリミア半島へのロシアの軍事侵攻のきっかけは、2013 年 11 月からウクライナで始まった「マイダン革命」という、親ロシア政権への反政府デモでした。「じつはこのときウクライナの

反政府派を最も強力に支援したのは、当時オバマ政権で副大統領を務めていたバイデンなのである。彼はオバマ大統領に任命されてウクライナ問題を担当し、NATO 加盟の“超タカ派”として動いてきました。(中略) 米国が 2008 年以來、ロシアに隣接するウクライナでやってきたことは、ソ連がキューバでやったことと同じではないでしょうか。

「米国は東欧よりも、東アジアの心配をすべきです。(中略) 米国はウクライナの紛争のことばかりに気を取られていると、対中国に知的リソースを割くことができず、有効な戦略を立てられなくなってしまいます」、と。

ウォール街（あるいはグローバリスト）と国家権力との密接な結合の関係が明らかになった今、従来どおりの国家間の関係だけを追いかける目線では全体像は解けない。「マネーの動き」・「石油や鉱物資源の利権の動き」・「紛争が長引くほど軍産複合体が儲かる」などの、《軍産学医メディア複合体》という、強欲で反道徳の「利益集団」群の暗躍の側面をも視野に入れた、深い分析が必要とされてきている。

実際、2023 年 7 月の国連安全保障委員会の公聴会で、現在のウクライナ戦争の背後には、ネオコンと軍産複合体との癒着（「回転ドア」方式の戦争を長引かす、国連大使も含めた政府高官たちが、退官後に軍事会社の役職や報酬をもらっている広義の「ねずみ講」の仕組みである）についての、調査報道サイト編集長のマックス・ブレメンタールの証言が出ていた。その証言場面は世界中で大きな反響を呼び、その動画の再生回数は数千万回を記録した。

とくに、米国の国内インフラが老朽化していく中で、ウクライナへ高額の軍事支援を発表・実行しているが、この援助の使い道の、肝心の監査をバイデン政権はまったくしておらず、そのおカネや武器が関係ない所にも流れているいかげんな実態を指摘した証言でもあった。

過去の約百年間の米国では、世界の金融センターであるウォール街と合衆国政府が、ほとんど一体化して動いていた。合衆国政府の意志は、ウォール街の意志を反映したものであり、両者を区別するのは困難であった。

ニクソンがドルを金で裏づける義務を外した直後に、今度は実体のないところからカネがカネを産む金融工学を利用した「デリバティブ（金融派生商品）」が市場にデビュー。米国の投資銀行はこの錬金術によって、さらに巨額の利益を手にするようになってきた。

それが 2016 年のトランプ政権の登場により、「ウォール街と、他国に干渉しない理念を持ったトランプ大統領の合衆国政府とが敵対するようになり、その結果、トランプ氏は再選をかけた 2020 年の大統領選挙で、奇妙な敗退をすることになった」。

ミアシャイマーたちが示唆するように、ウクライナ危機とは、ウクライナだけのことではなく、ドイツ危機のことでもあり、ロシアとドイツの分断こそ、世界覇権をにぎる米英の隠れた勢力の「百年の計」と見ることもできる。（堤、2021a、144 - 148。ミアシャイマー、2022、146 - 157。ベルトン、2022、95 - 105。及川、2023a）

トマ・ピケティの『21 世紀の資本』（2014）は、大局的に、庶民の立場から「国際経済の真実」、つまり世界の「財の分配」における不公平な、メカニズムの現状を説明している。

米国のトップ 400 人の超富豪は、ボトムスの 6 割の国民よりもはるかに多額の資産を所有し、

トップ 1%層の金持ちが、ボトム 93%の国民よりも大きな資産を所有している。1950 年代のアイゼンハワー政権時までの米国では、欧州由来の深い歴史意識を持った、真つ当な道德規範が存在していた。しかし、1960 年代以降の米国では、自己規律と自己抑制を重んじる道德規範を徐々に失い、利己主義的な能力主義と拝金主義を信奉する無責任な人々が増えてきた。

近年、大富豪たちは自分の名前が表に出ないやり方で、米国の政界に何千億円もの政治資金をばら撒くようになってきた。

「例えばアメリカの税法には、「501c」という制度がある。この 501c とは、慈善、福祉、人権、環境保護、少数民族保護、女性解放、社会正義の推進といった主張を掲げる NPO は、「あらゆる人とあらゆる組織から、匿名で無制限の資金提供を受けることができる。その資金を、特定の政治家に所属する Super PAC に流しても良い」という機能を規定した法規である」。副大統領や有力議員に直接電話をかけて、「〇〇という NPO を通して、あなたの管理する Super PAC に〇〇億円流しておきました。ところで例のあの件に関しては、よろしくお願ひします」と伝えれば効力を発揮できるシステムのようなのだ。

シンガポールの外交官（元国連大使）であり、シンガポール大学の国際政治学教授を務めたキショー・マブバニは、「アメリカの政治資金は、legalized bribery（合法化された賄賂）である。これは legalized corruption（合法化された腐敗）なのだ」と述べている。

外交問題評議会終身会員のチャールズ・ファークソンもまた、「社会・経済システム」の腐敗、とりわけ金融部門の墮落を厳しく指摘している。

銀行は大量のクズ証券を組成、販売しただけでなく、金融システムを巨大なカジノへと変貌させた。2008 年のリーマン・ブラザーズなどの金融危機の際、「ゴールドマン・サックスでさえ、政府が AIG を救済してゴールドマンや他の大手銀行に対する債務を返済させていなかったら、生き延びることはできなかつただろう。（中略）「カネと刑事免責」がその答えだ。金融部門の個人の報酬体系は完全に有害なものになっていたし、どれほど非道なことをしても刑事訴追されることはない、銀行家たちは正しく予想していたのである」。

リーマン・ショック時のように、私的負債を公的債務（国、民衆）に付け替え、平然としているグローバル金融企業の役員たち、そして基軸通貨特権の存在。借りた「価値」を返さなくても罰せられない仕組みが、地球規模で形成されてきている。

（ジョンソン&クワック、2011。ファークソン、2014、26 - 33。伊藤貫、2021、268 - 277）

米国の政権を形作っている、回転ドア式で、民間企業の役員から政府高官へと一時的に就任した絶大な権限を持つ人たちは、当然に「選挙で選ばれた」人間ではない。

彼ら権限を持つテクノクラート群は、長い間、民主、共和党の両政党の中で生きてきて、各利権のシステムを作り、多数の利権を管理・運営していく立場だ。現在もその回転ドア式のネオコンが、「アメリカ合衆国」という“ぬいぐるみの中身”の《軍産学医メディア複合体》勢力の利益を最大化すべく、政権内で絶大な力を行使しているとみるべきだろう。

ところで、2023 年現在のバイデン政権下において、民主党首長が牛耳る米国の大都市の治安が、まさに今、加速度的に悪化している。ロスアンジェルス、サンフランシスコ、シカゴ、ニ

ニューヨークなどでは、ブラック・ライブズ・マター（BLM）暴動に連動する民主党首長たちが、BLM活動家の主張する「警察予算のカット」を忠実に実行し、警察は目の敵にされ、警官の退職率が非常に高くなった。

米国在住の多くの人々から悲鳴が聞こえてくるように、現在の米国で急上昇している犯罪の陰には、犯罪を犯しても起訴されず、たとえば950ドル（日本円で約13万円）以下の万引きであれば犯罪にもならない。即日保釈となり何回でも同じ犯罪を繰り返させているなどの、民主党首長の「悪しき司法システム改革」が影響していると言われている。

主要な大都市にあっては強盗や万引きが毎日であり、お店や日常の商いが不可能になっている。それどころか殺人やレイプが頻繁となり、もはや法治国家のおもかげもない、大変な状況が、民主党が首長の都市で拡大していると伝えられてきている。

たとえば、ミシガン州下院議員ラシーダ・タリーブは、「終身刑の禁止、3回目までは軽い刑期とする法律の改正（3ストライクス・アウトと呼ばれていた法律。それを何度も犯罪を犯しても重罪とならない法案に変える）、警官のスタンガン使用禁止、10年以内に連邦刑務所を廃止」という、極端に過激な意見を語った。

そのため米国各州の多くの市民たちは、自身の身を守るために銃を所持し、より多くの訓練を受けていることが伝えられている。実際に、日々治安が悪化しているロスアンジェルスやサンフランシスコから、共和党首長が治安を守っているテキサス州やフロリダ州へと住居を移転する世帯が増えている趨勢が顕著になってきている。

米国に長年在住の西森マリーは、大混乱の北米の社会状況をこのように指摘している。

トランプ大統領は、バイデン政権下で不法移民問題を浮き彫りにするために、わざと国境の壁を完成させずにワシントンに去った、とも言われている。バイデン政権発足とともに、テキサスでは毎日1万人の不法入国者が堂々と、国境を越えて収容施設に入っている。（収容施設を避ける麻薬密輸入などの数は記録されていない）。バイデン政権はなんと、彼ら不法入国者に衣服や携帯電話を与えた後、飛行機に乗せて米国の各地へと送っている。

「こうした現状は、フォックスとニュースマックス以外のメディアでは、まったく報道されません。しかし、2022年の夏に、テキサス州知事のグレッグ・アボットが、不法入国者をバスに乗せてマンハッタン、ワシントンDC、シカゴに送った後、それぞれの市長が文句を言って、連邦政府の援助を求めたことで、左派の偽善が明るみに出ました。その後、ニューヨーク市は、彼らを1泊500ドルのホテルに収容し、市民が激怒しています。9月14日には、ディサンティス州知事が、バイデンがフロリダに送りつけた不法入国者のうち50人を、左派の牙城であるマサチューセッツ州の島、マーサズ・ヴィンヤードに送りました」。

調査報道によれば、一般的に「国境越えを斡旋するカルテルに不法入国者が支払う額は、メキシコ人は2500ドル、中南米人は3000ドル、中国人は5000ドル、ロシアと中東からの密入国希望者は9000ドルです。斡旋金が払えない不法入国者たちは、入国後にカルテルが仕切る組織の家に監禁されて、借金返済のために奴隷や売春婦として働きます」。

肝心なことは、「バイデン政権はアメリカに入ってきた不法入国者の行方を追跡していないの

で、彼らが人体実験用に売られ、臓器提供のために殺されても、政府が気づくことはありません。低賃金で働く不法入国者は、アメリカの中間階級を潰して、アメリカを内側から崩壊させるための道具でもあります」。

(及川、2022、38 - 43。我那覇&山中、2023。伊藤貫、2023。西森、2023、156 - 158)

米国在住が長い山中泉によっても、信じられないことがバイデン政権下で起きていることを、日本国民の参考になればと発信している。

「すでに 2021 年だけで 200 万人の不法移民が出たが、速やかに合法移民とし、彼らに投票権を与える。過去、バイデン民主党が政権を取ったら、こうした政策を行うだろうとの予測は出ていたが、まさにニューヨークを皮切りに、一気にこの動きは進んでいる」。「バイデン政権は、この国の根幹を変質させていくことで、全体主義、共産主義国家のように国民の自由を様々に縛っていきやすい社会を作り上げつつあるのだ」。

2022 年 5 月には、『2000 ミュールズ (2000 人の運び屋)』という、不正投票用紙の運び屋の実態を描いた、ドキュメンタリーが公開され、2020 年の大統領選挙の各州で、大規模な不正があったと信じる人の数が急増した。

つまり、「トゥルー・ザ・ヴォウト (票を正す) という保守系組織が、ケイタイ電話の地理位置情報データを買って、ザッカーバーグが設置した投票箱と左派組織のオフィスを 1 日に何度も往復した運び屋の素性を突き止めました。

そして、投票箱の近くにある防犯カメラの記録と照合し、データの一部を使ってドキュメンタリー映画を製作すると共に、集めたデータを各地の警察に提供しました。そのおかげで、アリゾナ州では、不正投票用紙 (実在の有権者や死者の名前を無断借用して、あるいは老人ホームの住民の了解を得ずに代行投票者と偽ってバイデンに投票した投票用紙) を収集、投票した民主党工作員、元ユマ市長のギエルミナ・フェンテスが投票詐欺で逮捕され、有罪になりました」、などの各地での不正が報告されている。

(茂木&渡辺、2022。西森、2022、206 - 210。山中、2022、60 - 73、86)

「ペロシとアダム・シフは、バイデン大統領の息子、ハンター・バイデンのスキャンダル「ラップトップフロムヘル」(ハンター所有のハードディスクに大量の未成年少女の写真・動画や、中国・ウクライナからの賄賂を示すメールが含まれていた) が浮上した際、「完全にロシア側による偽情報だ」と言い続けていました。(中略) 結局、大陪審において、ハンターのパソコンに入っていた諸情報は本物であることが判明し、彼らの策謀は失敗に帰しています。『ニューヨーク・タイムズ』ですら「本物だった」と白旗をあげています」。

一方、「欧州全体が米民主党のようなリベラル思想に侵されています。どうして彼らはそこまで言論統制や思想統制をするのか。おそらくブレグジット (英国の EU 離脱) がショックだったのではないのでしょうか。(中略) 英国の政治学者、リチャード・タック、ハーバード大教授のように、ブレグジットを支持する左派知識人も現れています。自国の労働者のことを考えれば当然でしょう。巨大なグローバル企業に利用されているだけではないか、という声も出始めているのです」。



「共産主義者とネオコンは、ともにフランス啓蒙思想の系譜にあり、グランドデザインによって社会を作り直そうとする「設計主義的合理主義者」として、ある種、兄弟関係にあると考えています。ただし、フリードリヒ・ハイエクが指摘しているように、合理主義は一つではありません。もうひとつの合理主義、デイヴィッド・ヒュームに代表されるスコットランド啓蒙主義の系譜にある、理性の限界を自覚する「批判的合理主義」は、伝統や共同体と矛盾するどころか、(筆者注：『ワシテ文献』などの大宇宙哲理と同様に人類共同体の) その維持発展を支えるものなのです」。

日本は戦後も、スターリンが目指す世界共産主義革命の主たるターゲットの一つであった。しかも、各国の共産党と同様に、日本共産党はスターリンに隷従するコミンテルンの日本支部でもあった。

除名されるまで30年以上にわたり、日本共産党の活動家だった兵本達吉が指摘するように、今日の頼りない優柔不断の政権の状況から見て、戦前の日本政府の内務省と「むしろ特高警察の方が、日本を守り、日本国民を暴虐な専制政治から守っていたと言えなくはない」。

実際に、「そもそも共産主義勢力との『冷戦』を早い時期から開始していたのは、他ならぬ日本であった。それが開始されたのは、戦前の1925年、日本がソ連との国交樹立に伴い、治安維持法を制定してからであった」。(伊藤隆、2001。兵本、2005。坂本多、2005。福井、2020)

関岡英之の『帝国陸軍見果てぬ「防共回廊」 機密公電が明かす戦前日本のユーラシア戦略』(2010)や、小代有希子の『予定された敗戦：ソ連進攻と冷戦の到来』(2015)が示唆するように、日本政府が戦前に国民と社会を、海外勢力の共産主義(一党独裁の全体主義)の脅威からいかに守るかを、戦後の冷戦の到来以前に考えていたことが理解できる。

つまり、共産主義的思惟・フランクフルト学派などによる「コミュニティの品質」破壊に対しては、もはや従来の生ぬるい治安法規では、対処できないと考えられた。

日本大学国際関係学部の小代有希子は、このように述べている。

「これまで外務省や防衛省公文書館に埋もれていた資料を掘り起こしてていねいに読み込んで行くと、日本の指導者たちは、ソ連が日本と中立を維持していく意思がないことを早くから見抜いていたことがわかる。日ソ中立条約を結んだ松岡洋右自身が、まさにそうだった。太平洋戦争時、彼はすでに政界を引退していたが、ある日、彼が外務大臣時代に締結した日ソ中立条約が、いろいろな意味で誤りでなかったかと聞かれた。松岡は即座に質問を却下し、スターリンが日本の国益を守ってくれるなどとは、はなから期待していない。それでもあの時点で日本の大陸利権を守るためには、ソ連を中立にさせておく他に方法がなかったのだ、と述べたという」。

「陸軍大臣、支那派遣軍総司令官などを務めた畑俊六も、太平洋戦争勃発の頃、ソ連はいつか絶対に中立条約を破って日本に攻め込んでくる、これは軍内の他の最高指導者たちも同じ意見だ、と日記に書いている」。大戦中の日本人が、国際情勢の移り変わり、共産主義の脅威をよく理解して、米国とソ連の対立だけでなく、終戦前後の中国の内戦の行方をもかなり正確に予測していたことを、現代の日本人で知る人は少ない。

戦前の米国内に潜むソ連の諜報活動を、長い間黙殺してきた日本の歴史学会といえども、『ヴェノナ文書』と『ヴァシリエフ・ノート』を無視して現代史を語ることは、学問的良心があるのであれば許されない状況となってきた。

この『ヴァシリエフ・ノート』のオリジナル文書は、米議会図書館に寄贈され、米議会が設置したシンクタンク、ウィルソン・センターのホームページで、ノート自体のスキャン画像版、ロシア語原文、及び英訳が無料で公開されている。

そして今日、私たちにとって最大に危険な存在は、偽物の「人民解放の猿芝居」の、狂気の共産主義であり、強大な軍事力を背景に自らの勝手な、間違った「理想」を全世界に押し付けようとする米英のネオコン勢力なのではなかろうか。

(兵本、2005。坂本多、2005。小堀・中西、2007。小代、2015、138 - 151。佐々木、2016。福井、2020、155 - 172。福井・渡辺、2022、140 - 143、188 - 199)

ただし、2023年の米国の最新状況として、大部分の「正義（ジャスティス）を判断する権力を、彼ら（民主党系の）裁判官たちが握っているから、闘いはそう単純ではない。さらに裏側がいろいろあってね。このリーガル・ギルドが公然と存在するアメリカのカバールですからね。これを甘く見てはいけません」。 (西森&副島、2023、149 - 157、281 - 302)

一般的に、1952年の創設以来、米国を代表するNSAは、米国随一の盗聴機関であり、暗号解読の機関でもあった。「フォート・ミード陸軍基地において、ずば抜けた頭脳を持つ数千人の博士号取得者、数学者、暗号解読者が暗号を解読し、分析、冷戦時代の次の一手に役立てた」。 (ハートウング、2012、378 - 382。パーロース、2022a)

続いて、サイバー戦争の現実と、人類社会が大崩壊の瀬戸際にある、厳しい現状にふれる。

## 6. サイバー戦争の実相、戦争経済の不道徳

ロシアによるウクライナ侵攻以前の、2017年6月27日の午後、あちこちのウクライナ市民は真っ黒なパソコン画面を目にした。ATMから現金を引き出せず、ガソリンスタンドで支払いができなかった。メールの送受信もできず、食料品も買えず、公共料金も支払えず、何よりも恐怖はチョルノービリ原発の計測システムが作動しなくなったことだった。

2023年4月の日本経済新聞によれば、日本において消費全体におけるキャッシュレスが100兆円分を越え、キャッシュレス比率が初めて3分の1を上回ったと言う。しかし、キャッシュレスによる経済活動の脆弱性が増し、有事の際に長期間、経済活動が止まる可能性が大きい。

ジャーナリストのニコール・パーロースによれば、2017年の7年も前から、中国サイバー軍のハッカーとその請負業者が、数千もの米国の産業システムに忍び込み、最新のステルス爆撃機的设计図からコカ・コーラの製法まで、あらゆる企業秘密が盗み取られていた。

「私（パーロース）が《ニューヨーク・タイムズ》紙のITセキュリティチームで働いていたあいだ、私たちが「サマーインターン」と呼ぶようになる中国人ハッカーは、毎日、北京時間の午前10時にネットワークに出発して私たちの情報源を探り、決まって午後5時に退出し

た」。

米国のセキュリティ・リサーチャーが不正侵入を追跡すると、中国大陸の大学生にたどり着き、とくに膨大な国家予算がつけ込まれている上海交通大学が多いと言う。また別のケースでは、中国の大手の「テンセント」の従業員にたどりついたと言う。

「標的にしたどの企業においても、中国のハッカーはソースコードのレポジトリを無気味なほどうまくハッキングしていた。不正侵入によって、彼らはコードをこっそり改竄できた。やがてそのコードが商品に組み込まれて市場に出回った時には、そのソフトウェアを利用した顧客に攻撃を仕掛けることができた」。

彼らは、フォーチュン 500 に名を連ねる大手企業や研究所、シンクタンクから、米国の知的財産を盗み取っていたのだ。国家情報長官を務めたマイク・マコーネルは、私（パーロース）にこう語った。

「政府や連邦議会、国防総省。航空宇宙部門、貴重な企業秘密を有する企業の重要なコンピュータを調べた結果」、中国によって「感染していないコンピュータは、ひとつとしてなかった」。そこで私たちは、サイバー戦争の世界における肌寒い一発触発の、特段に厳しい現状を把握しておかねばならない。

「スノーデンが暴露した文書のなかで特に不安を掻き立てたのは、NSA が通話記録のメタデータを収集していた件だろう。誰が、誰に、いつ、どのくらい長く電話で話したのか。そして合法的な介入プログラムとして、NSA はマイクロソフトやグーグルなどに、裏で顧客データの提出を求めている。(中略) 漏洩した機密文書は、NSA が市販のハードウェアやソフトウェアのほぼすべてに、バックドアを仕込んでいたことについて言及していた。

その膨大なライブラリは、おもなアプリケーションからソーシャルメディアのプラットフォーム、サーバー、ルーター、ファイアウォール、ウイルス対策ソフトウェア、 아이폰、アンドロイド、ブラックベリー、ラップトップ、デスクトップ、OS まで多岐にわたった。ハッキングの世界では、見えないバックドアには、SF の名前がある。「ゼロデイズ」だ。ゼロデイは「インフォセック (情報セキュリティ)」や「中間者攻撃」と同じように、セキュリティ専門家が乱造し、私たち素人には馴染みがないサイバー用語のひとつである」。

「そしてスノーデンが暴露するまで、(2007 年に世に出たアップルの) 아이폰のユーザーは幸せなことに、NSA がはめた見えない“監視用の足輪”にまったく気づく様子もなかった」。1990 年代、国防総省の軍事予算は 3 分の 2 に削られたが、サイバー分野だけは別だった。どの諜報機関の内部でも、見つけた「最善のゼロデイは最善の機密情報を捉え、それがサイバー予算の増額につながる」ことを学んでいた。

ゼロデイの発見は金儲けにもなり、昼も夜もコンピュータ画面にかじりついているハッカーは、大小のテクノロジー企業を含めて、世界中に数万人にも達すると推定されている。

「その魔法のマントをまとって姿を隠せば隠せるほど、スパイやサイバー犯罪者はますます大きな力を手に入れる。最も基本的なレベルにおいて、ゼロデイとは、修正パッチが存在しないソフトウェアやハードウェアの欠陥を指す。(中略) ゼロデイは、ハッカーの兵器庫のなか

でもとりわけ重要なツールだ。ゼロデイを発見することは、世界中のデータにアクセスする秘密のパスワードを発見するようなものだ」。

世界中の普通の人々の暮らしは、最新のデジタル技術の土俵の上に成り立っている。

IT 技術の専門家たちは、日常に使用されるデジタル機器は、ゼロデイ、セキュリティホールだらけだとも指摘する。しかもすでに、「NSA の数十万のインプラントは、世界中のネットワーク、ルーター、スイッチ、ファイアウォール、コンピュータ、電話に深く埋め込まれ」、毎日それらがテキストメッセージ、メール、会話を積極的に吸い上げ、NSA のサーバー群に送り込まれている。「それ以外の多くはスリーパーセル（潜伏工作員）であり、緊急事態が発生するか、将来に重要なサービスが停止するか、全面的なサイバー戦争が起きるまでは潜伏を続ける」。

2009 年には、「フォート・ミード陸軍基地の銅線に覆われた壁の奥で、アメリカはサイバー戦争の新たなルールを設定した。その年から、アメリカ以外の国の重要インフラに、コードを埋め込むことを容認しただけではない。国境を越えて、よその国の核開発計画を無力化することを、アメリカは完全に問題ないとしたのである」。

そして、「2012 年、オバマ大統領は諜報関係の高官に、海外の標的となる「システム、プロセス、インフラ」のリストを作成するように命じた。翌年、その機密の指令をリークしたのがスノーデンだった。（中略）NSA のさまざまなマルウェアの多くはスノーデン文書で暴露されたが、それ以外にもたくさんあり、電話の会話、テキストのスレッド、メール、産業用機械の設計図も窃取できた。感染したコンピュータのマイクをオンにして、周囲の音声を収集するマルウェアもあった。スクリーンショットを盗み見し、標的が特定のウェブサイトアクセスするのを妨害し、コンピュータを遠隔操作で終了させ、全データを破壊し、削除した。また、キーボード操作を乗っ取り、検索履歴、ブラウズ履歴、パスワード、暗号化データ解読に必要なカギも窃取できた」。

また、正当な文書に偽装した PDF ファイルをメールに添付して送付し、標的を感染させることもできた。

今日注目を集める「エクスプロイト」とは、コンピュータのソフトウェアやハードウェアの脆弱性を利用し、コンピュータに有害な動作をさせるプログラムや、そのようなプログラムによる不正アクセスなどの攻撃を指す。

「ランド研究所の調査によれば、平均的なゼロデイ・エクスプロイトは発見されるまでに約 7 年かかるのに対して、およそ 4 分の 1 のゼロデイ・エクスプロイトが 1 年半以内に発見されるという。以前の調査では、ゼロデイの平均寿命を 10 か月と割り出していた」。

グローバルなサプライチェーンに、破壊工作が仕掛けられる可能性も増大してきている。家庭電気製品や医療分野のカルテから、沖合の風力発電・石油掘削装置、送電線インフラ、役所の公共サービス、金融機関の決済システム、デジタル通貨などによる給料支払いまで、私たちの日常生活自体が大きな脆弱性を抱えているのだ。

（パーロース、2022a、21 - 49、97 - 107、191 - 247、323 - 343。松原、2023）

KDDI は 2023 年 8 月 30 日に、人工衛星を活用した通信サービスの実用化に向けて、米宇宙

企業「スペース X」との新たな業務提携を発表した。スペース X 社が開発した衛星通信サービス「スターリンク」は、高度 550 キロの低軌道上にある衛星のネットワークを利用するため、既存の衛星通信に比べ通信速度が速く、大規模な地上インフラを必要としない。

現在のウクライナ戦争の特徴のひとつは、ウクライナ側とロシア側の味方をして、参戦してきた国際ハクティビスト集団の数の多さである。「ハクティビスト」とは、DDoS 攻撃やウェブサイトの改竄などのハッキングを通じ、オンライン上で政治的・社会的主張をする人々を指す。米国のサイバーセキュリティ企業「フラッシュポイント」の集計では、2022 年 3 月 5 日時点で 50 もの、政府や軍に所属していないハクティビスト集団が、ウクライナ戦争に参加していた。国際ハッカー集団「アノニマス」なども、軍事侵攻直後に、ロシア政府機関やロシアのメディアのウェブサイトへの DDoS 攻撃を表明している。

一方、2022 年 2 月 25 日にロシア政府への支持を表明したのが、2020 年に登場以降、活発にランサムウェア攻撃を続けてきたサイバー犯罪者集団「コンティ」である。

イスラエルのサイバーセキュリティ企業「チェックポイント」が分析したところ、コンティがハイテク企業のような組織構造になっていることも判明した。このコンティと他のハッカー集団との関係についても明らかになってきた。たとえば、日本企業や大学、自治体の間でも感染被害が拡大しているコンピュータウイルス「エモテット」関連のハッカー集団とも協力しているようだとされる。

「エモテットに感染すると、今までにやりとりしたことのある相手の氏名、メールアドレスやメールの本文などの情報が盗まれてしまう。そして、あたかも今までに自分がやりとりしたことのある相手からの返信メールのように見えるなりすましメールが作られ、他の人々に送付されていく。そのため、ついなりすましメールの添付ファイルをクリックし、感染してしまう人がネズミ算的に増えていく。非常に厄介なコンピュータウイルスだ」。

(松原、2023、133 - 154)

2023 年 3 月、米国議会下院の外交委員会は、中国系動画投稿アプリ「TikTok (ティックトック)」の、米国での一般利用を禁止する法案を賛成多数で可決した。米国ユーザーの個人情報が、ティックトックを通じて中国政府に渡るのを防ぐなどの狙いであった。

2021 年 3 月に、LINE の日本人ユーザー 8600 万人の個人情報が中国側に閲覧可能な状態にあり、実際に情報が漏出していた恐れがあるとのニュース報道があった。

ところが日本政府は、業務改善命令ではなく行政指導でお茶を濁して、依然として国民と行政をつなぐ道具にする模様であり、これは日本国の終わりの始まりではないのか。

報道によれば、これら日本の情報にアクセスしていた中国企業は、①中国で AI (人工知能) サービス機能の開発をしている LINE の子会社。②不適切な投稿の監視業務を委託されている中国の会社で、1 日で約 9 万件の書き込みなどを監視していた組織体とのことであった。この監視対象業務は、人力では不可能であり、当然そこには不適切な投稿を判断し、抽出するための AI が活用されていたはずで、各アカウントの傾向を AI で効率的に分析していたのだろう。

米紙ワシントン・ポストは 2023 年 8 月 7 日、中国人民解放軍のハッカーが、日本政府の最

高レベルの防衛機密を扱うコンピューターシステムへの侵入を報じている。

2019年の三菱電機へのサイバー攻撃などのように、海外子会社の拠点で本社との接続のために使用される小型ルーターを乗っ取り、ネットワークに侵入する手口が多い。ルーターを乗っ取ることで正規の通信に見せかけるので、発覚するまでに若干の時間がかかるという。

米国では「国防権限法」に基づき、ハイクビジョン（抗洲海康威視数字技術）やダーファ（大華技術）の監視カメラの使用は禁止である。「ならば日本はと言えば、ダーファ、ハイクビジョンの監視カメラを警備会社大手のセコム、ALSOK、セントラル警備が使用しているばかりか、ファーウェイとZTEのルーターを使用しているのがソフトバンク、au、楽天、ソニーなど、殆どである」。有事に監視カメラが遠隔操作され、動きの筒抜けや稼働の停止が懸念される。

そして周知のようにLINEは、通信機能として、端末のアドレス帳に登録してある電話番号やアドレスなどを使っている。また、LINEには友達などの誕生日を通知するという機能があり、そこから「誕生日通知で人脈の構図の把握」や「よく行く場所の特定」、「生活圏・行動範囲の特定」、「仲間とのやりとりの把握」、「趣味と経済状況の把握」など、ほとんどすべての情報が他国の諜報機関に収集されている、LINEの使用という危険な状況の現在である。日本政府による国民への、「大事な情報漏れに留意せよ」との注意喚起がもっと必要ではないのか。

（坂東、2019、170 - 178。2022、36 - 40。堤、2021b。宮崎、2023、144）

ところで、フェイスブックは「実名登録」が基本であり、そのために利用者の年齢、性別、住所地、職業などの個人情報が集積され、しかも利用者がどのような投稿に「いいね！」を押したのかなどの分析で利用価値が高く、当然に、広告料も高くて増益を続けてきた。

しかし、2018年9月には、フェイスブックは、ハッカーによってセキュリティの脆弱性を突かれて、利用者情報が不正に流出する状態が1年間続き、約5000万人分のアカウントに影響があったと発表した。その3か月後の12月には、ニューヨーク・タイムズ紙が、フェイスブックは収集したデータについて、IT企業を中心として約150社にアクセスを許可していた、と報じた。

「同紙によれば、マイクロソフトやアマゾンには、フェイスブック利用者の名前や連絡先、または利用者の友人の名前を取得し、動画配信のネットフリックスや音楽配信のスポティファイもフェイスブックのデータにアクセスしていたという。フェイスブックは現時点では、多くの企業との情報共有を中止しているが、アマゾンやアップルとは現在も情報の共有を行っている」という。（岩田昭、2019、171 - 180）

「TSMCやフォックスコンは台湾企業に見えるが、じつは中国で超優遇されている実質的な中国企業である」。中国政府が進める「デジタル人民元」が、孫正義のソフトバンク・ジャパンのデジタル決済アプリ「ペイペイ」と密かにタイアップしている。中国では、二大スマホ決済の「アリ・ペイ」と「ウィチャット・ペイ」が、いずれ中国政府が開発した「デジタル人民元」に吸収され、統合されていく流れであろう。

同じように日本では、「ペイペイ」や「楽天ペイ」「ドコモd払い」「auペイ」などが、すべて「デジタル円」（CBDC、中央銀行デジタル通貨）へと一体化されていく。どんな支払いも、

取引決済も、資金のやり取りも、おカネの流れはなんでもガラス張りになる方向ではある。

ただし、将来に予測される、必ず来る緊急事態のために、現金支払い制度は必ず残し、日本全体の 2~3 割の、地方を中心にしたインフラ設備には、井戸を掘るなどわざとアナログの領域を残しておく政策が、国民の生命を守るための今後 100 年間の安全保障上の最重要事項だ。

警視庁は 2011 年から、三次元顔画面識別システムを運用し、民間の防犯カメラデータの相互運用を始めている。2021 年には、厚生労働省が健康保険証対応マイナンバーのカードリーダーのシステムとして、米国企業の AI 顔認証ソフト「SAFR (セイファー)」の導入を採択したという。2024 年までに、紙の健康保険証の原則廃止が表明されたが、その意味はマイナンバーの生体データを AI と紐づけるシステムが一人歩きし始めているということだ。

欧州委員会の「人工知能 (AI) 規制枠組み規制案」では、リアルタイムの生体認証や、マイノリティ (少数派) を脅かす AI の利用、政府による個人の信用度のスコアリングなどは「禁止」の事項である。生まれつきを持った生体の特徴、人事判断に利用されるスティグマの生体分類、及び「大量監視」の AI 利用に警鐘が鳴らされている。(カツ、2022、310 - 320)

さらに、日本の主要な新聞ではほとんど報道されないが、YouTube (2022 年 10 月 9 日、14 日で実際の動画) で見られるように、欧州各地で反 NATO のデモが起きている。米国に引きずられるように NATO は東進を続けてきた。フランス、ドイツだけではなく、スペイン、イタリア、チェコなど EU 全土に、生活費高騰に憤る抗議活動が広がっている。欧州の一般国民の、「反 NATO・反 EU の思いは、米国ネオコンに同調するブリュッセルに巣食うグローバリスト官僚には届かない」。

「EU にリアリストの眼があれば、ウクライナの尻を叩くのではなく、トルコのように、外交的解決を図るようにゼレンスキー大統領に促すべきであった。(中略) シュルツ独首相は先のバリ島での G20 の場で次のように発言した。(ロイター電：2022 年 11 月 15 日)「もう一度ははっきりと言っておきたい。世界がこの不況から脱却する最善の方策はロシアのウクライナに対する戦争を終わらせることだ」。トルコによる仲介のあった 2022 年 3 月の時点では、ロシアとウクライナの両国には、戦火を拡大させない意志があった。そして実際に、暫定的合意がなされたようであった。

「しかし、この合意は文書での合意に至らなかった。ウクライナ交渉団メンバーの一人デニス・キリーフが暗殺されていたのである。2022 年 2 月 28 日、ベラルーシで行われた交渉に参加した一週間後、ウクライナ情報部にロシアのダブルエージェントだとされ射殺された (イスラエルタイムズ：3 月 6 日付記事)。筆者 (渡辺惣樹) は、ロシアと何らかの妥協を覚悟した勢力への、ウクライナ政権内部の対口強硬派による見せしめの処刑だと疑っている」。この事件はウクライナの真の愛国者たち、すなわちリアルに大局を見据え、ウクライナ国民のこれ以上の損耗防止と復旧の人員温存のため、停戦の交渉にのぞむメンバーたちを大きく怯えさせた。

「難しい外交交渉では互いが何らかの妥協案を示す必要がある。ウクライナ交渉団は妥協案提示に消極的になった。そんなことをすればロシアのエージェントだとレッテルを貼られ殺されることを覚悟しなければならない。それでも何らかの妥協が必要だと考えるグループもいた

が、それをポリス・ジョンソン英首相が潰した。ジョンソンは、キリーフ暗殺事件のおよそ一ヶ月後の4月9日、突然にキユーを訪問した」。揺るぎない軍事支援を続けるので、そんなに早く戦争を終わらせるな（軍事産業を儲けさせろ）の意であったのだろうか？その真意はわからないままである。

## 7. 「コミュニティの品質」と各国の精神文化体系を守る

総合の視座をもったA・ネグリとM・ハートは、近年の世界全体に形成されてきた、グローバル化の階層的秩序体系・ネットワーク上の世界権力の領域を横断的に、生息の枠組みを浮かび上がらせ、それを《帝国》と名づけた。

その後二人は、『帝国』(2000)に次ぐ、『マルチチュード』(2004)と『コモンウェルス』(2009)で、より具体的な各種社会経済現象の軌跡と、要因相互の連関性の分析に焦点を移している。

多くの国際機関、とりわけ「WTO（国際貿易機関）は、グローバルな国際的貴族層のためのフォーラムであり、そこには国民国家間のあらゆる敵対性や矛盾、利害の衝突、権力の不均衡などを見ることができる」。

私たちが自明と思われている所有権・財産権と近代法体系の基盤は、じつは特殊な一解釈に過ぎない脆弱性を持っている。

根本的に考える法学者たちによれば、《帝国》が決めた法とは、主として多国籍グローバル企業の利益に貢献する「新自由主義グローバル化」など、ネオコンたちが企画・実行する「戦争経済」体制をも含めて、ほとんどが収奪の目的達成のために用いる手段だという。

二人は、地球を覆い尽くしつつある《帝国》的権力に抵抗する集団的な主体を「マルチチュード」と名づけ、グローバル社会の公平と、コミュニティの質の向上の可能性、及び「対抗《帝国》」のプロジェクトを平和的に打ち立てようと試みてきた。

そして二人は、『コモンウェルス』において、「コモン」と「ウェルス」の関係性をふまえ、〈共(コモン)〉的な富(ウェルス)からなる均衡のある世界を制度化し、平和的に管理運営し、普通の民衆の立場から、私たちが生きる「コミュニティの品質」を問いかけている。(ネグリ&ハート、2005a、273 - 279。2005b、143 - 146、265 - 271。2012、119 - 126、242 - 248)

そもそも「コミュニティの品質」の本質は、素朴な社会を「未開」や「前近代」の残存として見るのではなく、人間がまっとうに互いに、全体の人々に公共レベルで仕える側面をもつものである。その点で、古代の思惟体系だけでなく、ラテンアメリカ研究のマヤ系先住民のフィールド調査の観点なども参考になる。

つまり「真正な社会」(レヴィ=ストロース)とは、顔のみえる関係でつながる小規模な社会であり、けして本質主義的に近代以前の小規模な閉じた共同体を想定しているのではないことだ。「メンバーシップ(資格)に流動性のないアイデンティファイ(帰属)ではなく、活動することにつながるビロング(所属)を基盤とするコミュニティの形成を再領土化戦術と呼びたい」。

大きく見れば私たちは、「クルソー・マヤ」であることがコミュニティ活動に参加できる条



件ではなく、参加することでクルソー・マヤ（筆者注：たとえば日本人）「になる」のである。

（蔵内、1979。デランティ、2006。初谷、2011、98 - 101）

ところで、経済学者でもあり社会学者でもあった高田保馬（1883～1972）は、全体社会の「体制」維持の過程を、「構造」と「変動」とに分ち、主に社会的な「勢力」の観点から社会変動の全体の動きを、巨視的に捉えようとした。

そしてさらに、蔵内数太は、時間の流れの側面から、社会的潮流の主体としての権勢をもつ「利益集団」などを視野に入れ、現在栄華をきわめる「現（げん）集団（役割集団 *Rollegruppe*）」、今後実力を増大して追いついてくる可能性のある、たとえば「非営利中間組織」、「個人事業主（LLP）制度」集団など、「後（こう）集団 *Nachgruppe*」の分析概念を提唱した。

勢力を持つ個々の「利益集団」（多国籍企業や超富裕オーナー集団、覇権国の諜報機関傘下の企業群、及び彼らに有利な、国際的法体系を設計する専門家集団、医療利権のうごめく WHO（世界保健機関））などがどう動いてきて、今後どのように動くのかの視点でもある。

それは、国際経済社会に構造的に埋め込まれたルール（制度的虚構も含む）の下で、覇権を持つ主要集団の、ネオコンなどの強引な「戦争経済」の働きが行き過ぎて人類の絶滅（核戦争）に至らないよう、現状を検証する学術的叡智にもつながっており、大切な客観的視座である。

ジョゼフ・スティグリッツは、ますます拡大する一方の今日の戦争経済を、批判的にとらえる経済学者の一人である。イラクとアフガニスタンにおける米国は、これまで軍人と文官が担ってきた、囚人の尋問、爆弾の処理、高官の武装警護などの任務を、今では民間の請負業者に外部発注している。

多くの軍事コンサルタント会社がからむ、このような民間依存には重大な欠陥がある。第一の欠陥は、請負業者が公務員と異なる、高額利益というインセンティブで動く点である。第二の欠陥は、注ぎ込んだ税金分の価値が得られていない点であり、例えばイラク復興資金の大部分は、安い労働力を使える地元建設業者ではなく、高値をふっかける米国のゼネコンに流れ込んだ。第三の欠陥は、業者をうまく管理できない現実である。国防総省は、請負業者を監査するための請負業者をさらに雇っているありさまだ。また、世界的に、これらの民間軍事会社の請負の多くは、《原価計算》契約である。コストをかければ利益が増える「ねじれたインセンティブ・システム」である。

そして政府の現金主義会計では、今日の実際の支出は記録されるが、未来の障害補償費などを含む将来的なコストは無視されている。つまり、イラク戦争などの《戦争経済》の真の勝者は、コンサルタント会社などをはじめとする、多くの分野の民間の軍事関連の業者であることを示唆している。（スティグリッツ、2008、245 - 268）

ところで、2017年2月7日、極左として名高い民主党のアレキサンドリア・オカシオ＝コルテス（通称 AOC）が中心となり、101人の議員団が、米国の下院議会で決議案「グリーン・ニューディールを創設する連邦政府の義務の認識」を提出した。

しかし、多くの人々が指摘したように、この決議案の内容には、気候変動や環境に関する対策はなく、環境問題とはまったく関係のない「社会構造の改変の偏った見解」が述べられている。

るものだった。

AOCの主席補佐官サイカ・チャカルバルティは、「グリーン・ニューディールの面白い点は、本来は気候に関するものではまったくなく、“どうやって経済構造全体を変えるか”というものだった」と、キコウヘンドウという方便を利用して、社会の変革という目的を達成しようとしていることを自ら認めている。

つまり、やろうとしていることの本質は、キコウヘンドウという流れに便乗して、世界の国々に社会主義・共産主義思想を浸透させる道具にしている側面がちらちらと見えてきている。

これには、約9300兆円の予算確保が必要とされていることからわかる通り、膨大なカネと各団体の利権が絡んでいる。「単純に利権に群がる、強欲の塊のような醜い連中がいることは間違いないかもしれませんが、その奥には（恐ろしい）左翼による社会変革が隠れている」と言われる。

（レビン、2020。やまかつ、2023、144 - 166。伊藤貫、2023）

ところで、「デジタルという仮想空間では、新自由主義のアメリカと共産主義の中国は結びついている、それがいまの世界なのです。「ネットで検索すれば世界のどんな情報も瞬時にアクセスできる」と多くの人が思っていますが、検索エンジンで世界の85%超のシェアを誇るグーグルが、（筆者注：中国と同じように西側世界も）都合の悪い情報を検索に引っかからないようにしていることはまだまだ知られていません」。

さらに、CBSの記者のシャリル・アトキンソンは、このように述べている。

2023年の現時点で、「ウィキペディアは多数の専門家の、総合的な知識が反映された最も正確で中立的な情報源と勘違いしている人が、一日も早く目覚めることを祈るばかりです」と。今日の世界の現実として、諜報機関に操作されているウィキペディアなどを鵜呑みにする危険性を広く世界に訴えている。

実際に、ウィキペディアの共同創設者のラリー・サンガーは、すでに客観性と信ぴょう性を失ってしまったウィキペディア崩壊を目指して、エンサイクロソフィアというオンライン情報源サイトを立ち上げた。このサイトのホームページには、こう記されている。米国内の「小さなエリート集団が、我々が何を知らべきかを定める権力を持つべきではない」、と。

深い問題意識を持って独立系の動画を検索していけば、例えば2024年の大統領選挙に出馬のK氏の、連邦議会の公聴会（2023年7月）での「ソーシャルメディア上の検閲について」の危機感あふれる発言などを知ることができる。（及川、2023b。林、2023。渡辺、2023b）

ところで、勤勉な日本人が創意工夫をかさねて積み上げた、国民全員の共通の財産である「国富」が、1990年代から2023年の現在まで、どんどんと海外へ流出し続けている現実がある。

1998年には、元日本興業銀行の吉川元忠たちが、国民の生活を守るため、強い警鐘を鳴らしていた。ずっと続く国富流出のメカニズムを、「ひと言でいえば、日本がモノ経済で稼いだお金を、アメリカが米国債（米国財務省証券）等の形で借金し、アメリカ経済はそのジャパンマネーの流入で潤っている。借金はもちろん返さなくてはならないが、アメリカ（FRB）はいくら（米国債で）借金を重ねてもドル紙幣を刷ることでしのげる。ここに基軸通貨国の最大の旨みがあります」。国民の財を大切に管理する財務省（大蔵省）の責任の立場から、「日本もプラザ

合意とひきかえに、今後は円建ての米国債ならば購入しましょうといった交渉を米国としてみる価値はあったと思います」。

アカデミーフランセーズ会員のジャック・リュエフたちは、このように厳しく指摘している。米国債を購入した国々は、米国側から見れば結果的に、民間の対外債務超過額の一部を公的債務（国家の対外債務）で肩代わりしたことを意味する。米国の銀行システムにおいて、非居住者ドル預金が、米国政府名義のドル預金（居住者預金）に振替えられるのである。借金の全部をさらにまた借金で支払っているにすぎない。いずれ「歴史上類を見ないこの横領にも似た制度の実態」があばかれることとなろうと述べている。

買わされるだけで、国民の意志で必要時に自由に売らせてもらえないという意味で、結局は、国民にとって究極の不良資産（吉川元忠）ではないか、とエコノミストたちから揶揄されながら所持する膨大な米国債は、1990年代半ばからの長期的かつ意図的なインフレ推進政策や、大幅な円高と円安の何回もの往復運動の為替差損で、資産価値はどんどん減じているようだ。

また、2023年現在で相続税の税制があるのは、世界全体の半分以下の44カ国でしかない。

世界に196カ国あるなかで、タイやマレーシアなどの東南アジアだけでなく、オーストラリアにもニュージーランドにも、中国にもインドにもロシアにも、中東の資源諸国にも、日本に在るような「相続税」はない。日本の国富が海外に流れていくカラクリの中で、国民が納めた有事のための「国民の貯え」が、財務省が買った「米国債」で塩漬けにされ続けている。

そして、『グローバル経済と法』（2000）を著した石黒一憲は、金融・保険・軍事・電力・知的財産権・電子マネー・暗号技術などに広く関係している、高度な「NTTの世界的技術」を守れとずっと訴え続けてきた。

じつはNTTが民営化された頃から、米国は日本の通信市場に、トロンの採用見送りなどの大きな圧力をかけ続けてきた。当時、「自国のマイクロソフト社を支援して、英語でしか対応できないOSを国際標準化させることで世界覇権を維持しようという国家戦略があったことは言うまでもない」。その後の1995年に、またしてもNTTの分割・再編問題を起こさせた背後にも、1994年から始まった米国の「年次改革要望書」の圧力の存在があった。

「つまり、（高度な通信技術をもつ）NTTの市場シェアを取り崩して外資に与えろ、というのがアメリカの本音だということです。私はNTTの人たちに、「政府持ち株の解放と会社法改正、とくに三角合併に気をつけろと警告」してきました。2023年8月に内閣府が急になだした、「NTT株の放出」案などは、日本の高度技術の保全と、国民経済の安全保障をまったく考えないところの売国の行為ではなからうか。

その状況下で、塩漬けの米国債の一部の売却も検討すべきとの声もある。たとえば、2011年3月の東日本大震災の際、日本はせっかく貯えてある米国債の一部を売る手段もある、と指摘してくれた勇気ある海外の経済学者もいた。

（リュエフ、1973、233 - 237。吉川、1998、42 - 54。石黒、2006、170 - 177。伊藤貫、2023）

現在「ネオコン」と呼ばれ、本来は不要な「戦争」で荒稼ぎする通常コンサルティング会社に籍をおく人々のグループは、「軍産複合体」の利権と1990年代から深くかかわってきた。

たとえば、1990年代に米国はクロアチアに続き、ボスニアにも軍事援助したが、政商リチャード・パールのコンサルタント会社は、ボスニア政府にこの軍事援助をどのように使うのかの助言をおこない、多数の米軍事企業との契約をまとめた。また、トルコからボスニアへの武器支援のルートを開き、戦後は両国政府の軍事協力をアレンジしている。

破綻した通信会社のグローバル・クロッシング社に対し、パールは自分を雇えば、同社のある事業部門を中国系企業に売却することを米政府に承認させると約束していた。中国のような潜在敵国に対するハイテク資産の売却には、対米外国投資委員会（CFIUS）の承認が必要だ。また、ローラル社の衛星情報を中国に不正に渡した嫌疑もかけられていた。中国の核ミサイルの命中精度と射程距離を向上させる行為だった。

主要な軍事企業とコンサルタント会社と高級官僚たちが、現在のウクライナ戦争と似るように、国際政治経済を縦断して結びつき、各私的集団や営利ファンド、その他の機関と連携して、複雑な「利益集団」群の「軍産複合体制」をつくってきたようだ。（ハートウング、2004、120 - 124。ブリオディ、2004。アベラ、2008。菅原、2009、61 - 75。及川、2022b）

ウィリアム・D・ハートウングによれば、現代では、軍事産業が担っているのは兵器生産だけではない。たとえば、ロッキード・マーティンは、米国のFBIのためのバイOMETリック技術の開発や、国税庁向け米国民の納税申告書類も管理している。2005年には、米国の国勢調査局との関係を、6年間5億ドルの契約に拡大した。そして、ロッキード・マーティンは米国だけでなく、英国とカナダの国勢調査でもデータ処理の仕事を請け負っている。

ハートウングたちは、国勢調査や納税に関するたくさんの個人情報や、そのような一つの民間企業・米国の軍事産業に扱われてよいのか、と問うている。

ずっと日本国に盛られ続けている「新自由主義の毒」、つまり国民の富が海外に流出し続ける実態を分析して、国民が汗を流した果実が国民自身へと行き渡る、1990年代までのもとの健康な身体（国体）を取り戻す対策が、反転へ向けての第一歩である。

たとえば「不登校児」増の問題にしても、是非はともかくとして、この広がる現象を根本的に突き詰めていけば、ある意味、人類普遍の公明正大な精神文化に反した《グローバリズムによる「人間の家畜化」》や、「弱肉強食の新自由主義」思想、及び歪んだ自虐史観「歴史教科書」に対する無意識下での、自分たちの文化的アイデンティティを守ろうとする条件反射の拒絶反応という側面が見て取れるのではないか。

西欧の精神文化においては、E・スウェーデンボルグ（1688～1772）やC・G・ユングたちが、この世の現象世界における、顕・幽がからまる不思議な諸事象を真摯に深く考究して来た。

日本におけるスウェーデンボルグの最初の紹介は、『天界と地獄』（1758）を1910年に邦訳した仏教学者の鈴木大拙であった。その後の丸山敏雄、西谷啓治、湯浅泰雄たちの深い思索ののちの2014年3月、伊勢神宮の第62回遷宮の機会に、笹川日仏財団主催の日仏シンポジウムが、皇學館大学の場で実現した。

竹本忠雄監修の『靈性と東西文明 日本とフランス 「ルーツとルーツ」対話』（2016）は、その際の両国のメンバーによる「靈性」の学際的研究の、世界最先端の問題をさぐった研究発

表の記録である。その「靈性」の力が、冷酷な物質主義の「新植民地主義（現代の新自由主義）」へ対抗の底力として、歴史的現実と密着した、人類共通の世界的なエネルギーとなっている。

カール・ポッパーは、隷属への道は、自由で合理的な議論の消失、思考の自由市場の消失、及びウソで固められた《空虚な言論空間》の日常化からはじまると言う。私たちは近年の、ソビエト連邦や東欧諸国における、密告だらけの《家畜》同様にされた、真実が人間とともに粛清される、共産主義社会の大参事の経験をけして忘れてはならないのだ。

（鈴木、1940。西谷、1961。湯浅、1980。ポッパー、2003、2014、307 - 321。西尾、2010。竹本、2016。丸山、2016。田中英、2023。渡辺、2023a。及川、2023a。伊藤貫、2023）

## むすび

以上、第一章から第三章までの「普遍なるもの」を物差しとして、2023年現在の「社会・経済システム」の歪んだ諸現象を相対化して、世界に勢力を張る《帝国》の生態と、現状の移民の問題点、国民の財産の海外流出や、サイバー戦争の実相などを巨視的に考察してきた。

最も危惧すべきことは、現実の地球文明のどの国においても、ジョージ・オーウェルの『1984年』の世界が、すでに現実のものとなってきていることだ。

膨大な儲けと利権がからんだ、擬制（フィクション）プロパガンダのグローバリゼーションは、多様な地球上の国々の文化を壊しながら、世界全体をひとつの独善的な基準に当てはめようとしている。その結果、各国が制定する法体系よりも優先させる、グローバリゼーションという別名、偽装された「新・植民地主義の収奪」が国、州、地域、村を支配するようになってしまった。

それに加え、「米中対立という単純な構図の陰で、じつは当のアメリカも、共産主義化、すなわち「デジタル・ファシズム」的体制を推し進めてきているという、事実を見逃してはならない。「政経一体」「個人情報」の掌握」という視点で見ると、中国共産党とアメリカ政府は「情報という分野を入り口にデジタル・ファシズム化しつつある」点で、いまや非常によく似てきている」状況である。

そもそも外国の民間企業が提供するデジタル・サービスに、一国の行政が丸ごと乗っかってしまう低次元のありさまは、あまりにも危機感が欠けていると言わざるを得ない。セキュリティ対策が不十分なまま、一気に脆弱なデジタル化を進めることは、壮烈な《サイバー戦争》の状況下、丸腰で戦場に出ていくことであり、縄文時代から続く私たちの生命を守る、「アナログ社会」という天然に備わっている防御の高い壁を、わざわざ壊しているありさまである。

この中途半端な状況下で、マイナンバーカードとキャッシュレス化の一気呵成の推進は、デジタル・ファシズム（共産主義・グローバリズム）陣営が用意している、私たちが長年にわたって築いてきたまっとうな「コミュニティ」大破壊の「落とし穴」へ、自らはまりに行く大愚行ではないのか。

社会の安定した秩序というものは、精神文化という、目には見えないものを共有しているこ

とにより成り立っている。

原初の霊性（倫理観）あふれる「古代文献」のひとつの、『ヲシテ文献（ホツマツタエ、ミカサフミ、フトマニ他）』が5・7調でリズムカルに詠うのは、天然の、規制を受けない“精神の自由”の高みである。そこから「夜中に女性が一人で歩ける」、「落し物がきちんと見つかる」、「拾い主から届けてもらった喜び」などの、安全面や生活環境の魅力が生まれている。

最優先課題が金儲けという《軍産学医メディア複合体》が、言論空間を検閲・情報封鎖し、世界のルール作りをする腐った世界に、本当の《地球文明》の持続可能性は成立し得ない。

永遠に「霊性（倫理観）」あふれる“精神の自由”の高みを目指す、「誠実自然」の人類であり続けたいものである。

（付記：本稿は筆者の個人的研究及び見解に基づくものであり、天理大学アメリカス学会の見解ではないことを申し添える）

注1 C・C・ギリスピーの『科学思想の歴史』（1965）などを訳された島尾永康先生たちに知的探求の灯を授けて頂いた、関西学院の高等部から大学への進学では、全体社会の鳥瞰にあこがれて迷うことなく社会学部を選んだ。1969年度における大学の社会学部では、蔵内先生はすでに大学院での指導が主であった。しかし幸運にも、時間社会学の領家穰先生の基礎ゼミ（2回生対象）の番外の集まりの場に時々来られ、その都度有益なご教示を賜った。参考に、教養課程の「社会学」は塩原勉、「経済学」は丹羽春喜、専門課程での「社会集団の考察」は清水盛光、「産業社会学」は西山美瑛子、「法社会学」は及川伸（文学部）、「意味論」は片桐譲、「科学史」萩原明男（文学部）、「家族社会学」は光吉利之、「宗教社会学」は森東吾先生などの贅沢な陣容であった。1949年生まれの私たちが、古代史（銅鏡・銅鐸）や神社、川面凡児、フェノロサ、日本の行く末など蔵内数太博士に直接にふれて学んだ、最後の世代のグループだったのかもしれない。

注2 若き頃、1980年代前半にかけて朝の出勤前に、FMラジオの聴きたい音楽番組の録音をセットして仕事に出かけていた。その当時の、小泉文夫氏の解説する「世界の民族音楽」は筆者が好きな番組の一つで、それから40年経った今も、時々インドのシタールや、インドネシアのガムラン音楽など、それらの音源コレクションに癒されている。その頃、日本中のどの街を歩いても、ポピュラー音楽や、尺八、三味線、民謡、謡曲などの楽しまれている様子が、外に漏れ聞こえていて、まさに「ホモ・ルーデンス」の世界の、精神文化の花盛りのお国の感じであった。ところが2003年以降、中間層を大切にす政体とコミュニティが壊されてきている状況下、第二次産業（各種製造業）のフィールドでの経験を基に、「社会・経済システム」に関する諸論考を発信してきた経緯である。

注3 欧米などでは、出稼ぎ目的での入国を防ぐため、原則としてアルバイトを含めた留学生の労働は制限される。学校への入学の条件も厳しく、学力や語学力の高いハードルをク

リアしなければ入学は認められない。現在、日本で学ぶ留学生は、中国と韓国だけで全体の半分以上を占めている。日本はこれら海外からの留学生に超膨大な税金を注いできたが、この制度はすでに役目を終えたのではないか。複数の中国人留学生が一日の免税上限額 50 万円ぎりぎりの買い物を繰り返して、多額の利益を得ていたことが広く報じられた。また、日本国民の私たちがぎりぎりに運営している、「国民健康保険」制度を悪用し、病気持ちの中年や老人が留学生の資格で、しかも日本語が喋れないのにガン治療を受け 1500 万円ほどかかる治療費を 8 万円前後で済ませて帰る輩」たち悪徳の「ツーリズム」などが告発されている。(長尾、2022。宮崎、2023) そして、不公平だとかねてから問題になっていた、日本でアルバイトをする中国人留学生に適用されているアルバイト給与の免税措置の撤廃に向け、1983 年の日中租税協定の改定の検討が、やっとスタートした。結婚もできないくらいに低収入の、困難にある日本の若者たちの賃金を上げ、彼らにこそもっと私たちの税金を注ぐべきである。

#### 【参考文献】

- 秋元信夫 (2005) 『石にこめた縄文人の祈り 大湯環状列石』 新泉社
- アレックス・アベラ (2008) 『ランド 世界を支配した研究所』 牧野洋訳、文藝春秋
- 池田満 (1993) 「マスとハカリ (十万の位の用語) について」 『ホツマツタエ 秀眞政傳紀』  
松本善之助覆刻監修、池田満解説、新人物往来社
- ..... (2002) 『定本ホツマツタエ 日本書紀・古事記との対比』 松本善之助監修、展望社
- ..... (2012) 『新訂 ミカサフミ・フトマニ 校合と註釈』 展望社
- ..... (2020) 『ホツマ辞典 改訂版 漢字以前の世界へ』 展望社
- 池田満・辻公則 (2021a) 『記紀原書 フシテ 上 増補版』 展望社
- ..... (2021b) 『記紀原書 フシテ 下 増補版』 展望社
- 石井孝明 (2023) 「「裏口移民」クルドが埼玉で大暴れ」『Hanada 2023 年 10 月号』
- 石黒一憲 (2000) 『グローバル経済と法』 信山社出版
- ..... (2006) 「「NTT 解体」という謀略 危険な通信システムへの介入との戦い グローバリゼーションという名の虚構」『アメリカの日本改造計画』 イースト・プレス
- 伊藤貫 (2020) 『歴史に残る外交三賢人』 中公新書クラレ
- ..... (2021) 「超富豪に支配されるアメリカ」『WILL 2021 年 8 月号』
- ..... (2023) 「アメリカを中心に見る世界情勢② 大手メディアでは報道されない民主党の闇」伊藤貫チャンネル 2023 年 8 月
- 伊藤隆 (2001) 『日本の内と外』 中央公論新社
- 伊藤友計 (2020) 『西洋音楽理論にみるラモアの軌跡』 音楽之友社
- 今井隆太 (2006) 「地域社会の概念をめぐって 新明正道と蔵内数太」『国際経営・文化研究 Vol.11 No.1』 国際コミュニケーション学会編
- 岩田昭男 (2019) 『キャッシュレス覇権戦争』 NHK 出版

- 岩田温 (2023) 「オピニオン： 最高裁判決の滑稽と過激 女・男は存在しない？」『産経新聞 2023年9月10日朝刊』
- 及川幸久 (2022a) 『今世界を動かしている「黒いシナリオ」 グローバリストたちとの最終戦争が始まる』徳間書店
- ..... (2022b) 『そして第三次世界大戦が仕組まれた カネと資源をめぐる覇権争いの真実』ビジネス社
- ..... (2023a) 「国連安全保障理事会の公聴会でのネオコンの生態の証言」7月6日
- ..... (2023b) 「下院公聴会でのソーシャルメディア上の「検閲」に関する証言」「大統領候補K氏が語る」及川幸久 WISDOM CHANNEL 2023年6月17日、7月22日
- C・オーウェンズ (2022) 『ブラックアウト』我那覇真子訳、ジェイソン・モーガン監訳、方丈社
- ジョージ・オーウェル (1949=1972) 『一九八四年』新庄哲夫訳、早川書房
- 岡田真紀 (1995) 『世界を聴いた男 小泉文夫と民族音楽』平凡社
- 小代有希子 (2015) 『予定された敗戦：ソ連進攻と冷戦の到来』人文書院
- ヤーデン・カツ (2022) 「帝国と資本に仕える AI (人工知能)」他『AI と白人至上主義』庭田よう子訳、下地ローレンス吉孝解説、左右社
- 我那覇真子&山中泉 (2023) 「エマニュエル駐日大使の内政干渉に断固抗議」(パナマの山岳地帯を越境し米国へ向かう中南米や中国の人々の映像と現地報告) 5月8日、YouTube
- 川口マーン恵美 (2018) 「ドイツ人にならないドイツ移民たち」『正論 平成31年4月号』
- 川嶋将生 (1976) 『町衆のまち 京』柳原書店
- ..... (1993) 「中世京都文化の周縁」『藝能史研究 122号』
- 菊池英博 (2020) 『米中密約 “日本封じ込め” の正体』ダイヤモンド社
- 吉川元忠 (1998) 「ドルに喰い潰された日本の国富 債権国・日本がマネー敗戦を迎え、債務国・アメリカが好況に沸く。このカラクリは何か？」『諸君 1998年3月号』
- ..... (2003) 『マネー敗戦の政治経済学』新書館
- C・C・ギリスピー (1960=1965) 『科学思想の歴史 ガリレオからアインシュタインまで』島尾永康訳、みすず書房
- 蔵内数太 (1979) 「現象学的社会学」「法則・運命、規範・潮流 (理・法・勢・命)」「前集団・現集団・後集団」『蔵内数太著作集 第四巻』関西学院大学生協同組合出版会
- ジェフリー・ケイン (2022) 『AI 監獄 ウイグル』濱野大道訳、新潮社
- 小泉文夫 (1995) 『世界を聴いた男 小泉文夫と民族音楽』平凡社
- ..... (2003a) 『人はなぜ歌をうたうか フィールドワーク小泉文夫著作選集1』学習研究社
- ..... (2003b) 『呼吸する民族音楽 小泉文夫著作選集2』学習研究社
- 御所野縄文博物館・編 (2019) 『環状列石ってなんだ』新泉社
- 小林由来 (2021) 「岐阜県中津川市・恵那市・八百津町・川辺町・美濃加茂市・関市まで約 48



- km・北緯 35 度 31 分 40 秒ライン上に並ぶ巨石ネットワークとは』『J-AASJ vol. 3』日本天文考古学会編
- 小堀桂一郎&中西輝政 (2007)『歴史の書き換えが始まった コミンテルンと昭和史』明成社
- 古森義久 (2020)「ニューヨーク・タイムズ、ワシントン・ポスト、CNN はなぜ民主党びいきなのか」『WILL 2020 年 11 月号』
- 斎藤忠編 (1975)『新訂 日本考古学図鑑』吉川弘文館
- 坂本多加雄 (2001)『国家学のすすめ』ちくま新書
- .....(2005)『市場と国家 坂本多加雄選集Ⅱ』藤原書店
- 坂本龍一・河邑厚徳編 (2002)『エンデの警鐘 地域通貨の希望と銀行の未来』NHK 出版
- 坂本龍一・中沢新一 (2010)「青森県の小牧野環状列石遺跡」『縄文聖地巡礼』木楽舎
- 佐々木太郎 (2016)「ヴァシリエフ文書」他『革命のインテリジェンス』勁草書房
- サイモン・ジョンソン、ジェームズ・クワック (2011)『国家対巨大銀行 金融の肥大化による新たな危機』村井章子訳、ダイヤモンド社
- E・スウェーデンボルグ (1758=1910)『天界と地獄』鈴木大拙訳、東京有楽社
- 菅原出 (2009)『戦争詐欺師』講談社
- 鈴木大拙 (1940)『禅と日本文化』北川桃雄訳、岩波新書
- ジョセフ・E・スティグリッツ&リンダ・ビルムズ (2008)『世界を不幸にするアメリカの戦争経済』楡井浩一訳、徳間書店
- 関岡英之 (2004)『拒否できない日本 アメリカの日本改造が進んでいる』文藝春秋
- .....(2010)「防共回廊の源流 チベットとモンゴル」『帝国陸軍見果てぬ防共回廊 機密公電が明かす戦前日本のユーラシア戦略』祥伝社
- 施光恒・黒宮一太・柴山桂太・川端祐一郎 (2019)「移民政策で日本はさらに衰退する」『表現者 クライテリオン 2019 年 3 月号』
- 副島隆彦 (2020)『金とドルは光芒を放ち決戦の場へ』祥伝社
- .....(2023)「貢いだ、これまで 45 年間の累積の米国債の残高は 16 兆ドル (1800 兆円)」『米銀行破綻の連鎖から世界大恐慌の道筋が見えた』徳間書店
- 高田保馬 (2003)『勢力論 高田保馬・社会学コレクション 3』ミネルヴァ書房
- 竹村英樹 (2017)「蔵内数太の生涯と教育社会学」『法学研究 90 卷 1 号』慶應義塾大学法学研究会編
- 竹本忠雄監修 (2016)『靈性と東西文明 日本とフランス 「ルーツとルーツ」対話』勉誠出版
- 田中琢・佐原真編 (2011)『日本考古学事典 小型版』三省堂
- 田中英道 (2016)「神道は形象で表現される」『靈性と東西文明』竹本忠雄監修、勉誠出版
- .....(2023)『虚構の戦後レジーム』啓文社書房
- 谷直樹&増井正哉 (1994)『まち祇園祭すまい 都市祭礼の現代』思文閣出版
- 堤未果 (2021a)『デジタル・ファシズム 日本の資産と主権が消える』NHK 出版新書

- ..... (2021b) 「デジタル庁は中国の餌食になる」『Hanada 2021年10月号』
- ..... (2023) 「日本を喰い尽くすショック・ドクトリン」『Hanada 2023年10月号』
- ジェラード・デランティ (2003=2006) 『コミュニティ グローバル化と社会理論の変容』  
山之内靖・伊藤茂訳、NTT 出版
- 所功 (2012) 「伝承伊勢斎王の再検討」(景行天皇、仲哀天皇の御代から雄略天皇の御代へと一  
気に飛んで空白である伊勢斎王の記録) 『神宮と日本文化』 皇學館大學編
- 内藤裕子 (2019) 「ヲシテ文献にみるアワウタの役割」『関西外国語大学 研究論集』
- 長尾たかし (2022) 『永田町中国代理人』 産経新聞出版
- 中野剛志 (2019) 『奇跡の経済教室 基礎知識編』 KK ベストセラーズ
- ..... (2022) 『奇跡の経済教室 大論争編』 KK ベストセラーズ
- 中村大 (2013) 「縄文時代の空間認知と社会 大湯環状列石の分析」『季刊 考古学 第122  
号』
- 西尾幹二 (2010) 「皇室と日本精神 (辻善之助) の現代性」『GHQ 焚書図書開封4 「国体」  
論と現代』 徳間書店
- 西谷啓治 (1961) 「虚無と空」「空と時」『宗教とは何か 宗教論集1』 創文社
- 西田昌司 (2023a) 「「財務真理教」が日本を滅ぼす」『Hanada 2023年6月号』
- ..... (2023b) 「世界の仕組み、日本経済低迷の要因」週刊西田昌司チャンネル 7月
- 西森マリー (2022) 『フェイク・ニュースメディアの真っ赤な嘘』 副島隆彦監修、秀和システ  
ム
- 西森マリー&副島隆彦 (2023) 『カバール解体大作戦』 副島隆彦監修、秀和システム
- A・ネグリ&M・ハート (2005a) 『マルチチュード (上) 〈帝国〉時代の戦争と民主主義』 幾島  
幸子訳、水嶋一憲・市田良彦監修、NHK 出版
- ..... (2005b) 『マルチチュード (下) 〈帝国〉時代の戦争と民主主義』 幾島幸子訳、水嶋一  
憲・市田良彦監修、NHK 出版
- ..... (2012) 『コモンウェルス (下) 〈帝国〉を超える革命論』 幾島幸子・古賀祥子訳、水  
嶋一憲監修、NHK 出版
- 初谷譲次 (2011) 「近代条里空間を平滑化する人びと メキシコ・マヤ系先住民の再領土化戦  
術」『アメリカス世界のなかのメキシコ』 天理大学アメリカス学会編、萌書房
- W・D・ハートウング (2004) 『ブッシュの戦争株式会社』 杉浦茂樹・池村千秋・小林由香利  
訳、阪急コミュニケーションズ
- ..... (2012) 『ロッキード・マーティン巨大軍事企業の内幕』 玉置悟訳、草思社
- 羽根田正明 (1976) 「日本の環状列石遺構の分布」『日本の環状列石』 大陸書房
- 浜崎洋介 (2018) 「日本の自死 暴走するリベラリズム (移民国家の危機)」『正論 31年4月』
- 林千勝 (2019) 『日米戦争を策謀したのは誰だ!』 ワック
- ..... (2023) 「報道されない K 氏下院公聴会での発言」林千勝CGSチャンネル 7月23日
- ニコール・パーロース (2022a) 『サイバー戦争 終末のシナリオ (上)』 江口泰子訳、岡嶋裕

- 史監訳、早川書房
- ……(2022b) 『サイバー戦争終末のシナリオ (下)』 江口泰子訳、岡嶋裕史監訳、早川書房
- 坂東忠信 (2019) 「移民戦争への準備はできているか」他『移民戦争』 青林堂
- ……(2022) 「スパイ防止法の必要性」『スパイ』 青林堂
- トマ・ピケティ (2014) 『21世紀の資本』 山形浩生、守岡桜、森本正史訳、みすず書房
- 平井宏治 (2022) 『経済安全保障のジレンマ 米中対立で迫られる日本企業の決断』 扶桑社
- ……(2023) 《株主資本主義が日本を壊している》(企業は公けのもので、東芝の株主資本主義による無残な解体から何を学ぶかの解説) 「文化人放送局」9月22日、YouTube
- 平津豊 (2021) 「大湯環状列石の岩石配置図に関する検証」『J-AASJ vol. 3』 日本天文考古学会編
- 兵本達吉 (2005) 『日本共産党の戦後秘史』 産経新聞出版
- チャールズ・ファーガソン (2014) 『強欲の帝国 ウォール街に乗っ取られたアメリカ』 藤井清美訳、早川書房
- 福井義高 (2020) 「ヴァシリエフ・ノートの公開が意味するもの」「歴史修正主義論争の正体」『日本人が知らない最先端の「世界史」』 祥伝社
- 藤井聡 (2022a) 『プライマリーバランス亡国論 令和版 PB 規律凍結で日本復活』 育鵬社
- ……(2022b) 『グローバリズム植民地ニッポン』 ワニブックス PLUS 新書
- ……(2023) 「運転手不足への対応、安易なライドシェアの導入に反対」KBS 京都ラジオ『藤井聡のあるがままラジオ』 2023年9月18日
- 藤井聡&森井じゅん (2022) 『消費税減税ニッポン復活論』 ポプラ新書
- 藤岡秀英 (2008) 「蔵内社会学にもとづく「新しいコミュニティ論」の研究」『国民経済雑誌 第198巻第4号 平成20年10月』 神戸大学経済経営学会
- ……(2012) 「非営利中間組織など後集団の視点」『社会政策のための経済社会学』 高菅出版
- ダン・ブリオディ (2004) 『戦争で儲ける人たち ブッシュを支えるカーライルグループ』 徳川家広訳、幻冬舎
- キャサリン・ベルトン (2022) 『プーチン ロシアを乗っ取った KGB たち』 藤井清美訳、日本経済新聞出版
- ヨハン・ホイジンガ (1938=1971) 『ホモ・ルーデンス 文化のもつ遊びの要素についての定義づけの試み』 里見元一朗訳、河出書房新社
- ポール・ホーケン (2009) 『祝福を受けた不安 サステナビリティ革命の可能性』 阪本啓一訳、バジリコ
- ジョージ・ボージャス (2017) 『移民の政治経済学』 岩本正明訳、白水社
- カール・ポッパー (2003=2023) 『開かれた社会とその敵 第四巻』 フーベルト・キーゼヴェッター編 (第8版) 小河原誠訳、岩波文庫
- ……(2014) 「自己奴隷化状態へと至る共産主義の道」『K・ポッパー 社会と政治 開か

- れた社会以後』 J・シアマー&P・N・ターナー編、神野慧一郎他訳、ミネルヴァ書房
- 孫崎享&副島隆彦 (2023) 『世界が破壊される前に日本に何ができるか』 徳間書店
- 松原実穂子 (2023) 『ウクライナのサイバー戦争』 新潮新書
- 松本善之助 (1980) 「ホツマツタエはなぜ地中に隠れたか」『月刊ほつま 72号昭和 55年 1月』  
.....(1993) 『「ホツマ」 古代日本人の知恵』 溪声社
- 馬淵睦夫&松田学 (2022) 『日本を危機に陥れる黒幕の正体』 宝島社
- 馬淵睦夫 (2023) 『ウクライナ戦争の欺瞞 戦後民主主義の正体』 徳間書店
- 丸山敏秋 (2016) 「日本的霊性と生活規範 丸山敏雄が唱道した「純粹倫理」をめぐる」『霊性と東西文明』 竹本忠雄監修、勉誠出版
- ダグラス・マレー (2018) 『西洋の自死 移民・アイデンティティ・イスラム』 中野剛志解説、町田敦夫訳、東洋経済新報社
- ジョン・ミアシャイマー (2022) 「この (ウクライナ) 戦争の最大の勝者は中国だ プーチンが核ボタンを押すまで終わらない」『文藝春秋 2022年 6月号』
- 宮崎正弘 (2023) 『誰も書けなかったディープ・ステートのシン・事実』 宝島社
- 六車進子 (1991) 「蔵内数太の問い」『ソシオロジ No.112 第 36 卷 2 号』 ソシオロジ編集会
- 室伏謙一 (2019a) 「改正入管法に係る政策的課題と施行に向けて政府がなすべきこと」『表現者 クライテリオン 2019年 3月号』  
.....(2019b) 「日本を「外国人材」による多文化「モザイク構造」国家にしてはならない」『表現者 クライテリオン 2019年 5月号』
- 茂木誠&渡辺惣樹 (2022) 『教科書に書けないグローバリストの近現代史』 ビジネス社
- 茂木誠&原田峰虎 (2023) 「ほつまの世界、『フトマニ』のウタ (君が代の本歌か)」『茂木誠チャンネル』 2023年 8月 No.1~No.4の一連の『ヲシテ文献』の解説
- 森田成男 (2013) 『帝国の鳥瞰Ⅲ 「軍産複合体制」の広報と技術独占の視角から』『アメリカス研究 第 18 号』 天理大学アメリカス学会編  
.....(2014) 「「現集団」 概念と経済人類学の射程 山田方谷の経済政策と地域通貨の可能性」『アメリカスのまなざし 再魔術化される観光』 天理大学出版部、萌書房  
.....(2018) 「ニコラス・ルーマンの『社会の社会』『社会の経済』『社会の法』のまなざし」『J・R・コモンズの『制度経済学』、支払い共同体と履行共同体「債権者対債務者の関係」』『「現集団」 概念と経済人類学の射程 その 5 』『アメリカス研究 第 23 号』 天理大学アメリカス学会編  
.....(2020) 「蔵内数太の「現象学的社会学」と「理・法・勢・命」、『ホツマツタエ』と古事記、日本書紀の内容を対照、1300年の封印を解く』『「後集団」 概念と汎神論 (広義の神道) の射程 その 1 』『アメリカス研究第 25 号』 天理大学アメリカス学会編  
.....(2022) 「「かかん・のん・てん」「あぐり」 概念、その社会観から田口卯吉、B・アップルバウムたちの「経済学的座標軸」の共通性をさぐる」『アメリカス研究 第 27 号』

- ..... (2023a) 「ヲシテ文献研究から縄文語（日本語の起源）と欠史八代を考察する」
  - ..... (2023b) 『『ホツマツタエ』の34、38、39、40アヤ及び『フトマニ』のウタの考察』
  - ..... (2023c) 「住吉大社神代記、皇太神宮儀式帳、ヲシテ文献（フトマニ）の、相互関連性をさぐる」
  - ..... (2023d) 「ヲシテ文献（ミカサフミ）のキツヨヂノアヤ、サカノリノアヤ、ヒメミノアヤの考察」（いずれの論考も国会図書館のデジタルサーチにて閲覧が可能）
- 森永卓郎（2023）「岸田政権は財務省の傀儡となった」他『ザイム真理教』三五館シンシャ
- 矢谷慈國（2004）「蔵内数太博士の現象学的社会学 時間と全体社会について（英文）」『追手門学院大学人間学部紀要 第17号』
- ..... (2006) 「法則 Law 運命 Fate 規範 Norm 潮流 Stream」（英文）『追手門学院大学人間学部紀要 第20号』
  - ..... (2007) 「Zen Shuudan Preceding groups, Gen Shuudan Present groups, Kou Shuudan Subsequent groups」矢谷慈國訳、『追手門学院大学社会学部紀要（2）』
- A・ヤツフェ編（1973）『ユング自伝 2』河合隼雄・藤縄昭・井出淑子訳、みすず書房
- 柳原輝明（2021）「遺跡大湯環状列石の天体観測」『J-AASJ vol. 3』日本天文考古学会編
- 山岡鉄秀（2023）「川口市議会が問題視する《不法滞在者問題》」『文化人放送局』8月18日
- やまたつ（YouTube 番組「カナダ人ニュース」）（2023）『北米からの警告』徳間書店
- 山中泉（2022）「メキシコ国境開放の裏で行われている極めて残虐な犯罪」、「ニューヨークは市民権のない移民80万人に投票権を認め始めた」『アメリカの崩壊 分断の進行でこれから何が起きるのか』方丈社
- 湯浅泰雄（1980）「古代神道の基本的性格」『古代人の精神世界』ミネルヴァ書房
- ジャン＝フィリップ・ラモー（1722＝2018）『和声論』伊藤友計訳、音楽之友社
- ジャック・リュエフ（1973）『ドル体制の崩壊』長谷川公昭・村瀬満男訳、サイマル出版会
- 領家穰（1968）「社会的時間論 経験社会学的覚書2」『関西学院大学 社会学部紀要 16号』
- ..... (1985) 「蔵内社会学の基底にあるもの」『現代社会学 19号』アカデミア出版会
- マーク R・レビン（2020）『失われた報道の自由』道本美穂訳、日経 BP
- デヴィッド・ロスコフ（2009）『超・階級 グローバル・パワー・エリートの実態』河野純治訳、光文社
- 渡辺惣樹&福井義高（2022）『スペイン内戦からウクライナ戦争まで 「正義の戦争」は嘘だらけ ネオコン対プーチン』ワック
- 渡辺惣樹（2023a）『ネオコンの残党との最終戦争』ビジネス社
- ..... (2023b) 「ケネディ JR 「独立候補宣言」」『そうきチャンネル』2023年10月No.087
- 和仁佑安聡（1779）「ホツマツタエをノブ」他『生州問答』写真版、日本ヲシテ研究所